

岡田文弘

しかめ面の土地には帰れない

(2008.07～2009.03)



皆既日食の午後、一人の少女が山道を歩いていった。彼女は大きなスケッチ・ブックを小脇に抱えていた。膝まで伸びた長い髪の間、ほの白い顔と首筋が隠れていた。薄暗い木立の中、彼女の目が放つ光が空間を鋭く切り込んでゆくのだった。

少女は早歩きで前へ前へと進んでいった。その足取りは折り目正しくリズムを刻み、足音は微かな響きを残したまま、澄み切った空気の中に溶けていった。

山道は舗装されているどころか、狸や鼬の通るけもの道を少し押し広げてみただけのような代物で、倒れた竹や老木、のさばった蔓、幅の広い沢などが度々少女の前に立ちふさがった。太陽の光の乏しさが、道中の危なさに拍車を掛けていた。しかし彼女は何の難もなくそれらを跳び越し、更に先へと急ぐのだった。彼女は自分の足元すらよく見てはいなかった。ただ自分の足取りのリズムに則って、山を登ってゆくのだった。

やがて、少女は山の頂にたどり着いた。少女は山の下に広がるごとごととした世界の色合いと、山の上に広がる底なしの空がゆっくりと混ざり合ってゆくのを見やり、大きく深呼吸をした。彼女は息を吐くことも吸うこともしないままに、大きく深呼吸をした。

私はその傍らで静かに待っていた。

そして彼女は絨毯のように広がっている草の上に腰を下ろし、スケッチブックを開いた。クリーム色の画用紙が彼女の前に現れた。続いて彼女は木炭と食パンを取り出した。そこで彼女はほんの一瞬、その無機質な輝きを放つ目に、意外なほどおどけたような光を宿して、食パンの端を小さく噛んだ。まるで、ピクニックに来了子どもがおやつを食べるかのよう、彼女は食パンを齧った。しかしその後、一転してその目にはヒンヤリとした光が戻り、彼女は絵を描き始めたのだった。

私はその傍らで静かに待っていた。

彼女の木炭がなぞりとした世界が、少しずつ現出し始めた。彼女の丸めた食パンの破片によって、その一部が修正された。

彼女が描こうとしているのは、一本のカラマツであった。それは、彼女の視界の斜め左下、鹿たちが集う谷間の一角に生えていた。そして私は、彼女によって描き出される予定の、カラマツの絵であった。

しかめ面の土地には帰れない

路面電車日和

恐竜紳士 (Edit version)

ラビュリントスの預言者

新宿貧血綺譚

地涌菩薩

サンマ・トロイカ・ファンタステイカ *Sanna Toroika Phantastica*

象使いの挽歌

3文小説集

土曜日の本

栗鹿毛のカンタカ

路面電車日和

たちの悪い冗談のように良い天気だったので、わたしは路面電車に乗ることにした。こんな午後にはうってつけの旅路だ。あんまりにも、天気が良すぎるのだった。

わたしは駅前広場の一角に佇んでいる。赤茶けたクシヤクシヤの髪を風に躍らせ、ツギハギだらけの極彩色の服を着て佇んでいる。

そんな服、どこで売ってるわけ？と皆わたしのことを笑うのだが——まったく失礼なはなしだ。けれど、笑われるのは割と好きなので構わないが——お生憎様、こんな服、何処にも売っていない。実を言うと、わたしの手作りなのだ。丁度こんな風に天気のよいふざけているような日の午後のことだった、わたしは裏通りの古着屋で三枚の服を買った。古着屋の中は足の踏み場もないほどに大量の洋服が吊り下げられていて、それは丁度首吊り死体のように吊り下がっていて、わたしは息が詰まる思いで三枚の服を選んだのだ。しかし苦勞して買ってきたにもかかわらず、そのどれもわたしに似合わなかった。わたしは家に戻って、机の引き出しの中を転がっていた裁ちバサミを手に取り、その三枚の服を思うさま切り刻んだ。そうしてできた布の切れ端を、おんぼろミシンで縫い合わせ、新しく一着の服を作り上げたのだ。

しかし、三着を一着にしたので、二着分の布の切れ端が余ってしまった。わたしは余った布の一部を使って、大きなつばの帽子を作った。潰れた麩饅頭のような、大分とおかしな形だったが、なかなかの自信作だった。でも、その帽子はもうなくなってしまった。とあるみずぼらしい子どもに「かして！かして！」としつこくせがまれたので、小さな頭の上にかぶせてやったら、その子は何処かへ遊びに行ったり、ついに戻って来なかったのだ。

あの子どもは今も、わたしの帽子をかぶったままで何処かを走り回っているのだろうか。そんなわけで、わたしの手元には、ツギハギだらけの服が一着残っただけ。

夏のひざしが、駅前広場に佇むわたしの上に降り注いでいる。わたしは一冊の本を小脇に抱えている。その本は書店ではなく、八百屋で買ったものだ。通う人もいなくなり、古びて倒壊しかけた教会の前で、しなびたカボチャやレタスを山と積んだ八百屋の屋台が出ていた、その屋台の片隅、ボウルに山と盛られたトウモロコシの横に、この本が置いてあったのだ。

わたしは春菊を買いに行ったのだが、置き去られていたその本にすっかり魅せられてしまい、手に取ってみたり、ばらばらと捲ってみたり、その布張りの表紙の手触りを味わっている、店番の少年が——彼は口周りにヒョロヒョロと無精ひげを生やし、輝きのない大きな瞳をまぶたで半分だけ隠していた——ふと顔を上げ、「安くしとくから持っていいよ、お嬢さん」と言ってくれたのだった。こうしてわたしは春菊を買うのもすっかり忘れて、その本を買い取って帰ったのだった。

それが三年前の話なのだが、いまだにこの本は読んでいて飽きが来ない。というのも、いまだに一つも読めないのだ。なにしろ何語かわからない文字で綴られていて、一体何が書かれているのか、さっぱり分からない。そんなわけで、わたしはこの本を開くたび、そ

の時そのときによって頭の中で勝手な内容をでっち上げて楽しんでゐるのだ。その本は読もうとすればちつとも読めないのだが、読もうとさえしなければ、いくらでも好きなように読める本だった。

くしゃくしゃの髪の毛に、ツギハギだらけの服を着て、そしてわけのわからない本を小脇に抱えた、そんな間抜けな出で立ちのわたしの横には、一羽のカモがしゃがみ込んでいた（カモにとつて、「しゃがみ込んでいた」という形容が妥当なのかどうかは知らないけれど、わたしにはそう見えた）。見覚えのあるカモだった。たしか、この近くの川で見かけたことがある。背中に矢を深々と突き立てて、まんじりともしなかったカモ――。今日も彼は矢を突き立てたままでいた。さつきわたしは矢を抜いてやろうとしたのだが、彼はうるさげにわたしの手をすり抜け、おしりを左右にふりながら歩き去ってしまうのだった。

夏の暑いひざしが空気を歪めて、わたしの目に映った風景は絶え間なくゆらめいていた。その揺らめく風景をいらいらするような速度で切り裂きながら、一両の路面電車がやつとわたしたちの前に姿を現した。電車の体軀は、使い古したアルミのおべんとう箱を思わせた。しかしわたしの心になによりも強く焼きついたのは、その車体の側面いっぱい描かれているラクガキだった。色とりどりのペンキを使って無軌道になぐり描かれた、どこの国のものでもない地図。わたしは自分のツギハギだらけの服を見、そしてサイケデリックな電車を見、「同じにおいがするなあ」とつぶやいた、胸中にて、そつと。

缶ビールを開ける時の音がして、扉が開く。慢性的な疲労を抱えている風情の運転手が、わたしたちを無言で出迎えた。わたしはカモを抱きかかえて乗り込んだ（後から考えてみれば、カモは別に電車を待っていたわけではなかったのかもしれないが、もし嫌だったならば彼のことだ、はっきり意思表示をしたことだろう）。

わたしとカモを乗せて、電車はゆつくりと走り出した。慢性的な疲労を抱えている風情の運転手の背中を見やったり、窓の外を見やったりしながら、わたしは久しぶりに爽快な気分を味わっていた。開かれた窓から勢いよく吹き込んで来る風が、わたしのうなじに浮かぶ汗を乾かしてゆくのがわかった。

もう夏なのだ、かげろうでゆがむ街、整然と立ち並ぶ街灯と、等間隔で植えられているプラタナスの木々が、ダリの絵のような曲線を描いて、あまりにも青すぎて白く見えすぎる空に溶けてゆくのは痛快だった。道路沿いに立ち並ぶビル、家々、余りにもありふれ過ぎていて違和感すら覚える都市風景、その中で生きている時はうんざりするような情景なのに、なぜ電車の窓を通して見ればこんなに素敵なスナップに見えるのだろう、まるでペテンにかけられているみたいに思えた。

この街中で一番大きな川をまたぐ橋を渡ったところで、こけた頬ぼねを持ち、顔の左半分影を集めている、やせっぽちの男が一人乗ってきた。彼は不恰好に形崩れした巨大なリュックサックを背負っていて、それを下ろすこともなく席に座った。わたしは顔を上げ、彼の方を見た。リュックサックの上部の口が開いていて、そこから大量の風ぐるまが顔をのぞかせていた。どうやらリュックサックの中いっぱい、風ぐるまが詰め込まれているようだった。風ぐるま売りだ！とわたしはつぶやいた、胸中にて、そつと。彼は席に座るなり船を漕ぎ出したのだが、それを見てわたしは、ああきつとこの人は徹夜でこんなに大量の風ぐるまを作っていたんだろう、それですっかり疲れちゃって、やせこけて、頬もこ

けてしまつて……などと、勝手な感慨に耽るのだった。それにしてもこの風ぐるま売りは本当に生気のない顔つきでいた。電車の窓から吹き込んで来た風が彼の背中の風ぐるまをからからと回して、まるで風ぐるまが彼の命を吸い取つて、元氣にからだを回転させているような、そんな風に見えた。

——と、しばしの間、風ぐるま売りを眺めていたのだけれど、ふと何かがわたしの服のポケットを突つづいているような感触を覚えた。顔を向けると、カモと目が合った。

わたしはポケットの中に、おやつチョコレット・キャンディを一掴み入れていたのだ。こいつは、その匂いを嗅ぎつけたのに違いない。でも、カモはチョコレットなんて食べるのかしらん？わたしは首を傾げつつも、せがまれるままにチョコレットの銀紙を剥き、カモの小さなクチバシの中に放り込んでやった。カモの食欲は旺盛で、銀紙をむくわたしの手が追いつかないくらいだった。あんまりにも煩くせがむので、わたしは銀紙の方を放り込んでやった。するとカモのやつ、眉をしかめて（カモに眉があるのかは知らないけれど）「グワア」と鳴いたので、わたしは思わず吹き出してしまった。

さて、出発してからもう数十分ばかり走つたからだろうか、窓の外はだんだんと見慣れない風景に変わりつつあった。そう言えばこの辺りにはあんまり来る機会がないものね、この電車に乗らない限りは。わたしはチョコレットの銀紙をむきながら、声には出さず独り言を呟く。枝振りの悪い木が生い茂つた自然公園、余り使用されているようには見えない市民ホール、ソフトボールの大会が開催されている学校のグラウンド……。同じ街に住んでいるのに、わたしの人生とは交差することなく生きている人たちがそこにいた。

いつか一度こちらの停留所で下車して、その付近を当てもなく散策してみるのも楽しいかもしれない。何処か新しい場所に辿り着いたり、誰か新しい人に出会うかもしれないし、そうすれば、少々煮詰まり加減のわたしの人生も少しは変わるかもしれない。

それは実に素敵な計画に思えた。そして素敵に思いながらも、多分いつになつても絶対に実行しないんだろうな、きっと。絶対に。

——そんなことをボンヤリと考えながら、休む間もなくカモにチョコレットをやり続けていたのだが、いつまで経つてもポケットの中が空にならないのはどういう訳だろう。尽きることも無くこぼれ出てくるチョコレット・キャンディ。もしかして、わたしの中からこぼれ出しているのかもしれない。

しかしさすがにキリがないので、わたしはカモの円い頭を平手でぽんと叩き、「もうおしまい！」と言って、チョコレットをやるのを止めた。意外なことにカモは特に不満を表すこともなく、すんなりとクチバシを閉じた。

電車はたいくつな速度で走り続ける。赤茶けた髪につぎはぎドレスのわたし、背中に矢突き立てたカモ、そして虚脱した風ぐるま売りを乗せて、かげろうに歪む街中を深海魚のように泳いで行く。停留所が来ると律儀に停車し、缶ビールを開ける時の音を立てて扉を開くのだったが、乗って来る人も殆どいないのだった。ついさっき、高校生らしき男の子と女の子の二人組が乗って来たのだが、三駅ほど進んだところで降りて行ってしまった。彼らは狐につままれたような、「乗る電車を間違えた」と言いた気な顔付きで、あたふたと降りて行ってしまったのだ。

そうだきつとあの子らは乗る電車を間違えたのだろう、とわたしは思う。男の子は頭の後ろの寝癖が目立っていたし、女の子はお化粧が——まるで無理な背伸びでもしているように——似合っていなかった。それでも二人とも、夏をキャンバスとして自分たちの肖像画を描く権利を、しっかりと持っているようだった。(わたしは過去・今を通じてその権利を持っているし、これから先獲得する見込みも無いのだが)

わたしは遠ざかって行く彼らの後姿を眺めながら、少しの間空想にふける。——教室の窓から吹き込んで来る爽やかな風が、ブラスバンド部のチューニングの音と、休み時間のおしゃべりの声、高らかなチャイムの響きを運んでいる。校舎の真っ白い壁と青空のコントラストが眩しく、そして時が経つとそれは白とオレンジ色のコントラストとなり、夕焼け空の下に広がる放課後の校庭に影ぼうしが伸びてゆく。——わたしはため息をつく。何故だか知らないけれど、顔が赤くなってくるような気がした。

そんな、わたしの顔を赤くさせてしまうような風景を、いつか失くしてしまった時、あの二人はもう一度この電車に乗りに来ることだろう。乗り間違いないかではなく、今度こそ本当にこの電車に乗りに来ることだろう。そう思った。

二人の後姿が見えなくなるところで、わたしは本を開いた。手始めに、窓の外に広がっている空——トマト色した太陽を抱いて、サンゼンたる輝きをばら撒いている、あのたちの悪い空——を、大きな海に変えてしまおう。そして、このラクガキだらけの路面電車は、もうがたの来かかっている旧式の帆船にしまおう。わたしの傍らで「我関せず」とでも言いた気な顔つきでいるカモは、思い出せないような昔の歌をうたうオウム。後部座席でまどろんでいる風ぐるま売りは、カギヅメの手をもった船長。信号機が青に変わって、慢性的な疲労を抱えている風情の航海士はハンドルを大きく切り、船は右折する。おもかじ・いっばい！窓から吹き込んでくる排ガスの臭いの風は、潮の香りがする風となり、わたしはくしゃくしゃの髪の毛を躍らせて、水平線の向うを見やる。

今日この本からわたしが読み取るのは、古めかしい海洋冒険小説。それはわたしに、懐かしい記憶を呼び覚ましてくれる。小学生の時、放課後の寒々とした図書室でそんな本を読んでいた覚えがある。平板に訳された、ひらがなだらけの文章の本、しかしずっしりと重たくて、挿絵も少なく、ちよつとばかり敷居が高く感じられたものだが、わたしはかわず読み進めていたものだ。そうすると、校庭や教室から響いてくる甲高い声もずんずん遠ざかってゆくようで、心地よくもあり、また妙にやり切れない気分にもなり、わたしは一層本の世界の中に没頭するのだった。そしてわたしは思ったものだ——船乗りになりたい、と。

そう、わたしは船乗りになるべきだったのだ。でも、わたしはなれなかったのだ。船に乗るどころか、路面電車に乗ることが精いっばいの遠出なのだ。なぜわたしは船乗りになれなかったのだろう。きつとわたしは本を開くよりも先に、海辺まで走って行って、停泊している船の中へどれでもいいから乗り込むべきだったのだろう。大きな酒樽の中にでも隠れていれば、何とかうまく潜り込めたかも知れないのだ。しかしわたしは、そうしなかった。船はとつくに港を離れてしまった。そしてわたしは何処へも行けずじまいだし、何処へも帰れずじまいなのだ。だからわたしは今日も、読めもしない本を開くのだ。背中に矢を突き立てたオウムが歌っている——おもかじ・いっばい！

・・・・・・・・・・・・・・・・

突然電車が停まった。

すると、風ぐるま売りがのっそりと立ち上がり、覚束なげな足取りでバスを降りて行った。扉が開いて吹き込んで来た夏の生暖かい風が、彼の背中の中の何百という風ぐるまを回して、その回転をエネルギーとして彼が動いているようにも見えた。彼の目は閉じられたまま、何かを夢見ているのか、それとも夢見ることをやめてしまったのか・・・・・・・・。

降りて行った風ぐるま売りを見送るため、わたしは本から顔を上げたのだが、窓の外の風景の変わりように改めて驚いてしまった。いちめんに広がる、緑色の田んぼ。壊れた耕運機が風雨にさらされて、静かに錆び付いている。山沿いには崩れかかった納屋、その脇に停められた軽トラのタイヤには、泥がこびりついて白く光っている。そして、くすんだ色のガードレールが細い路にそって伸びてゆく。用水路の横には、水量調整に使う重たそうな袋が二つ三つ、暑さにやられたかのようにうな垂れている。こんもりとした小さな木立の中、常緑樹の枝の向うに、紅色の鳥居が微かに見え隠れしている。わたしが本を読み始めた時には、まだ街中を走っていたというのに、とうとうこんなに遠い所までやって来てしまったのか。

駅前の雑踏の中から出発したこの電車は、最初は街の大通りを通っていたものの、そのうちにだんだんと窓から見える家々がまばらになってゆき、しまいには人影もない、田んぼに囲まれた小さな村々にまで到達したのだ。舗装もされていないあぜ道のような細い路に、錆びかけたレールが敷かれていて、その上をアルミの弁当箱を思わせる小さな電車がゆらゆらと走って行くのだ。一体誰がこんなところまで線路を引いたのだろう、とわたしは不思議に思う。街の大通りを颯爽と走っていたはずの電車は、いつしか田舎のバスのような有様となり、そしてわたしは読めない本を読み耽っていたのだ――風ぐるま売りが降りてしまうまで。

「時間調整のため十分間停車いたします」慢性的な疲労を抱えている風情の運転手が、しよっぱい声でそう言った。なんだか本当にひどく疲れているみたいだ、とわたしは彼の後姿を見て思った。

わたしは相変わらず、窓の外に広がる田園風景を眺め続けていたのだが、青空の下、田んぼの向こうから、わらわらと小さな影ぼうしがいくつもいくつも、黄色い声を上げながら駆け寄って来た。彼らは片一方の手に風ぐるまを持ち（風ぐるまは、向い風をいっばいに受け止めて回転していた）、もう片方の手にはペンキの入ったバケツを提げていた。村中の子どもたちが駆けつけて来たのだった。

子どもたちは電車を取り囲み、手にしたペンキで車体に思い思いの線を引き始めた。彼らの気まぐれで透き通ったいたずら心は、めまぐるしく電車の表情を変化させ、みるみるうちに誰も見たことがない国の、誰も見たことがない地図を浮かび上がらせるのだった。こうして、新しいラクガキが電車を彩ったのだった。

わたしは首を伸ばして子どもたちを見た。ひよつとすると、わたしの帽子をかぶったまま何処かへ行ってしまったあの子が、その中に紛れ込んでいるかもしれない、そう思ったからだ。しかし彼らは重たそうなバケツを提げているにも関わらず、軽々とした足取りで

ちよこまかと走り回っているのです、わたしは彼らを目で追うのが精一杯だった。わたしは必死で窓にへばりついていてた。しかし駄目だった。しばらくして、子どもたちはわたしの焦りなど何処吹く風でわらわらと走り去って行き、緑いちめんの田園地帯の中に溶け込んで行った。わたしは思わず「待って！」と叫んで手を伸ばしたが、声にならなかった。伸ばした手は何処にも届かなかった。

でも、たった一人だけ立ち止まった子どもがいた。その子はほんの一瞬、振り返ってわたしを見た。そしてすぐさまきびすを返し、一目散に走り去って行った。こうして、子ども時代のわたしは田園地帯の中に溶け込んで行ったのだった。後姿が溶け込んで見えなくなるその刹那、彼女の頭に乗っているツギハギだらけの帽子のつばが、風にひるがえった。

そして、方向転換した電車がゆっくりと動き始める。折り返して、線路を逆にたどり始める。もう帰る時間なのだ。

わたしは本を閉じ、ついでに目を閉じる。

静けさの中に沈殿してみる。

走り始めた電車は都市を目指す。まどろみ続けるわたしを乗せて、田んぼいちめんの世界を通り過ぎ、窓の外に見える家々の屋根が増えて行き、しまいには、きれいにアスファルトで塗り固められ、プラタナス並木が整然と植えられ、人と車でごった返した街にまで帰って行くのだ。

・・・・・・・・・・・・・・・・

次に目を開けた時には、電車は駅前広場の一角で動きを止めようとしていたところだった。あつと言う間の帰還だった。まるで長い夢から覚めた朝のような心持で、わたしは伸びをひとつした。朝の光の中ではなく、夕暮れのオレンジ色の中で、わたしは大きく伸びをしたのだった。

その傍らで、まるでわたしの真似をしてでもいるように、カモが羽根を伸ばしていた。

こうしてわたしは、またぞろ駅前広場に戻って来た。ああまた振り出しに戻ってきたわけか、とわたしはため息をつく。今日の旅路がまるで白昼夢であったかのような気分で、わたしは駅前広場の一角に佇んでいる。赤茶けたクシャクシャの髪を風に躍らせ、ツギハギだらけの極彩色の服を着て、読めない本を小脇に抱えて。

それじゃ、俺もう帰るよ——そんな風に言いた気な背中を見せて、カモはわたしの元から歩き去って行った。一步一步、彼が歩みを進めるたびに、背中 of 矢が左右に揺れている。足取りが少しばかり重くなっているように見えるのは、チョコレット・キャンディを食べ過ぎたせいだろうか、それとも、べつな理由からだろうか。

駅舎に入ってゆく人々、駅舎から出て来る人々、広場で立ち止まり、噴水のへりやベンチに腰掛ける人々、わき目もふらずに通り過ぎてゆく人々、その姿、その息遣いが、まるで潮が引いてゆくようにわたしから遠ざかって行った。読めない本の見開き、一方のページには立ち尽くしたわたしの影が、そしてもう一方のページには去って行くカモの残像が描かれている。わたしはしばらくそれを眺めてから、そっと本を閉じた。そう、もう帰る

時間だよね。

カモの後姿を見送った後で、わたしは線路の上に目を落とす。線路はわたしの足元から、見えなくなるほど遠くまで続いている。一体何処に続いているのだろうか。何処にも続いていない気もする。わたしの中から伸び始め、そしてわたしの中へ戻ってゆく。円環が閉じ、その上を電車はぐるぐると回り続ける。いつまで回り続けるのだろうか、わたしは知らない。どうしようもないのだろう、きつと。

でもわたしは、いつかまたこの電車に乗ることだろう。今日みたいに、たちの悪いほど天気の良い日が訪れたら。読めない本がこれからも読めないままだったら。あのカモが背中を突き立てたままだったら。

わたしは歩き始める。チョコレット・キャンディを一粒、口に放り込んで。

恐竜紳士（ショート・バージョン）

ヨシコは立ち止まった。しかし本当は、立ち止まるつもりなど毛頭なかったのである。ただ、目の前に落ちていた何かを目にした途端、彼女はそれに心奪われ、歩くことすらも失念してしまったのだ。

それは別にたいしたものではない。何処にでも転がっていきそうな、一個のつまらない小石だったのである。

茫洋とした空からこぼれた光が、すっかり葉を落としてしまった木々の間をすり抜けて降り注ぎ、道の真ん中にぼつねんと在る件の小石を柔らかに照らしていた。それは普通ならば、そこに在ることすら見過ごしてしまうだろう、小さな小さな鉱物であった。ところが、その凡庸な小石が、彼女の心の隅へ奇妙な具合にひっかかってしまったのである。

何かしら心惹かれるものに会った時、年少少女は大きく分けて二種類の行動に出る。まず一つ目のヴァリエーションでは、年少少女はそれに深い意味を見出し（往々にして、そうした意味づけは単なる思い込みにしか過ぎないものだが）、畏敬の念すら抱き、崇拜する。

二つ目のヴァリエーションでは、年少少女はそれを必要以上に嫌悪し、邪険に扱い、あるいは、『悪いけど、まったく興味をそそられないよ』という素っ気ない態度をとり、無視を決め込む。

残念ながら、ヨシコはもはや少女ではない。ただ、かつては彼女も一介の少女であった。そして少女でなくなった今も、少女時代の心の残骸と思しき塵芥が心臓の奥に沈殿したままになっている。その塵芥が、小石を前にした時に、何の前触れもなく彼女の胸の中を漂い始めたのである。

ヨシコは手袋を脱いでから、腰をかがめて小石を拾い上げた。小石は、彼女の小さな掌の中にすっぽりと納まった。そのひんやりとした感覚を味わいつつ、ヨシコは無意識のうちに一つ目のヴァリエーションをシュミレートした……。ヨシコは注意深く小石を撫でさすった。なんだろう、やっぱりただの石ころに見えるが、変な胸騒ぎを覚えるぞ。ひよっとすると……。二つ目のヴァリエーションをシュミレートする。投げ捨て、蹴り飛ばした。小石はつんのめるようにして転がって行き、やがて道路から外れ、路傍に植えられた草木の中に消えてしまった。

そうやって小石と決別した後、彼女はなぜだか変に疲れた気がして、路傍に設えられたベンチに腰を下ろした。錆のついた背もたれに体を預けて上を向いてみれば、空は本当に茫洋としていて、その茫洋さ加減ときたら、ありとあらゆる種類のやる気が消え失せてしまいそうな有様だった。ああ、いい天気だ、とヨシコは胸のうちで呟いた。そして腕時計に目を落とすと、とつくに授業開始時間を過ぎていた。ああ、きつと今日は茫洋記念日か何かに違いない。茫洋記念日ならば、授業に行かなくても怒られやしないだろう。もう少しここでのんびりしてから、研究室に行つて本でも読もう。

ヨシコは研究室に籠って本を読み耽るのを日課としていた。古びた紙の日向くさい匂い、インキの奇妙に甘い匂い、紙魚の死骸の匂いを肺臓一杯に吸い込みながら、大きな長机に

向って、彼女は黙々と読み続けるのだった。そうしていると何だか自分が外界と切り離されたような、ひどく気楽な気分になって、まるで温かいお茶を飲んだ直後のように溜息を吐くのだった。

ちよつと指先で触れれば崩れてしまいそうな、それでいて何千年、何万年も変わらずに繰り返されているような倦怠と感傷の日々が続いていた。ヨシコはそんな日々の隙間に潜り込み、季節が廻り行くさまを息を潜めて眺めていた。自分が上手くやっているのか、賢く生きられているのか、分らずじまいだった。正直な話、そんな事はどうでもよかったのである。真つ黒な髪を襟足の処で切り揃え、化粧気のない顔に黒ぶちの眼鏡を掛け、地味な黒いコートを羽織り、気付けばまるで喪に服してでもいるかのような陰気な格好となり、しかし彼女はそんな事は全然、気にもしないのだった。ごくごくたまにしか。夜中、ふと喉の渴きを覚えて目が覚めて、時計の音と窓の外を走る車の音だけが自分を取り巻いている事に気づいた時ぐらいいにしか。

冷たい風が何処からともなく吹いて来て、ヨシコのコートの裾を乱雑な手つきで翻している。もう冬なのだ、木々は枯れ、空を仰げば曇天模様、着ぶくれした人間たちが気忙しく行き交っている。しかしいくら着込んでみようが、この寒さはするりと人間の隙間に潜り込んで澄ました顔つきでいる。茫洋、茫洋、寒々しい頭の中で、ヨシコは歌の文句のようにつぶやき続けている。彼女の白いため息は、ためらいがちに空中へ舞い上がり、そして四散して行く。さつき学校に来る道すがら買った、焼き立ての甘栗が一袋、彼女の手のひらをじんわりと温めていた。こんなもの買っているから授業に遅れるのだ、でもまあ、もういいや、と彼女はまた一つ溜息を吐く。温かいうちに食べるのが一番なのだけれど、そこはかとなし背徳感が胸と胃とに引つ掛かっているようで、食欲が湧かない。この栗は、後で齧る事にしよう。

カバンから文庫本を取り出し、少しだけ読みかける。すぐに止して、またしまい込む。甘栗の服を再び手にして、カイロ代わりにして暖をとる。目を閉じてみる。まぶたの裏は薄暗かった。そのままヨシコは全身の力を抜き、まどろみに身を任せようかと思ったが、ふと傍らに何者かの気配を感じて目を開けた。

視界の隅に入ってきたのは、型崩れしたシルクハットを被り、明らかにサイズの一回り小さい燕尾服を着て、昂然と胸を張ってベンチの端に座っている、一人の老紳士の姿だった。埃でレンズが白くなっている鼻眼鏡をかけ、深い皺が無数に刻みこまれたその手には、古新聞紙に包んだ四角い物体を持って、澄ました顔つきでいる。そして、右足だけ皮靴を履いていた（彼女は、雪山で靴を食ってしまった後のチャップリンの姿を思い出した）。ヨシコは少々面食らった。いつの間にこの人はヨシコの横に座ってしまったのだらう――そんな疑問がヨシコの胸の中でぼんやりと固まりつつあった時に、突然、紳士が口を開いた。「さつき君が蹴飛ばした石くれだがね」地鳴りのするような、苦くてとても口に出れないカカオバターのような声だった。

「――はい、何でしょう」ヨシコは、心なしか震えながら返事を返す。

「あれはわたしの左足のツメだったのだよ」

一陣の風が、ヨシコと紳士の間を通り抜けて行った。ヨシコの首周りを覆っていたマフラーが煽られて、はらりとほどけた。もう立春を過ぎたというのに、その風は肌を切り裂

くような冷たさを孕んでいた。ヨシコはマフラーを巻き直すのも忘れて、紳士に問うた。

「どういうことでしょうか？」

「そのままの意味だよ。取り合えず、自己紹介をした方がいいようだね」紳士は胸を張って名乗った。

「私は、かつて恐竜だった男さ。」

黙り込んでしまったヨシコに向って、紳士が言った。「さあ、君も自己紹介をし給え」ヨシコは消え入りそうな声で「私は——学生です」と呟いた。紳士は深々と頷き、さらに問うた。

「時に、恐竜と席を伴にするのは初めてかね」

「はい」

「まあ滅多に無いことだろうな。」紳士はまたしても、深々と頷く。「別に取って食ったりしないから、急いで行ってしまうおとししないで、もう少しの間この古いぼれの話に付き合ってくれ」どの機会を捉えて席を立とうかと思案していたヨシコは、心の底を見透かされたように思わず赤面した。

「私は数千万年前に死んだ。時に、死んだことはあるかね——」

「いいえ」

「幸運なことだ。」紳士は笑顔を見せた。その口から欠けた歯が覗いた。「死ぬのは余り、いい気分じゃない。何しろ突然にやって来る。何だかよくわからないもんだよ。いくら予兆が有っても、覚悟を決めている積りでも、生命の途切れる瞬間は突拍子もなく、まるで何かの冗談のように訪れる。まるで大きな欠伸を一つした瞬間のように、平凡な顔つきでね。」そして紳士は、首の関節を二、三回鳴らして見せた。

「今でも覚えているよ。昼飯時、私は巨大な首長竜を仕留めようとしていた。私はちつぽけな肉食獣で、その上すでに老いぼれていた。とうてい、首長竜と対等に渡り合えるだけの図体も、体力も、持ち合わせていやしなかった。どんな気分がすると思うかい、たった一匹で首長竜に立ち向かった時には——。空に溶け込んでしまいそうなくらい高い処で光っている、濁った二つの目玉に睨みつけられた時、どんな気分がすると思うかい？」

「分りません」分かるはずがあるものか。ヨシコは正直に答えた。

「そうだろうな、私にも分からないんだから」紳士は自分の言葉に自分で深く頷いていた。「とても感慨に耽っている場合ではなかったんでね。どんな気分かなんぞ、分かるはずもないさ。食うか食われるか——まあ向うは草食獣だから私を喰らいはしなかっただろうが——、とにかく、生きるか死ぬかの戦いだった。」

ヨシコはふと思った、なんだか以前にも、こういう事があった気がする——そうだ、お祖父さんだ。何時だったか、私がまだ小さかった頃、お祖父さんは熱心に戦争の思い出を語っていたつけ。南方の島に閉じ込められて、毎日行進する日々。誰もが戦争をやらされたのだ、あの時代には。

「私は首長竜の足に爪を突き立て、そして脇腹に食らいつき、致命傷を負わせた。彼の長い首がピンと伸び切り、濁った眼玉の光が失せてゆくのが分かった。いい勝負だった、全くもって、いい試合だったよ。私は勝利したのだ！しかし、私の方も無事ではなかった。あの丸太のような足で踏みにじられたせいで、私の背中には大きな亀裂が入っていた。その亀裂が私にとって命取りになるであろうことは、なんとなく分っていた。しかし私は最

後まで、闘争本能と食欲とを忘れようとせず、喰らいついていたのさ。

私の鋭利な牙は、肋骨の隙間を擦り抜けて彼の体の奥へずぶりと喰らい込み、私の強靱な爪は、後ろの右足の脛脛にしつかりと突き刺さっていた。そして首長竜は、まるで根元が腐った大木のようにゆっくりと横倒しになった——もはや力尽きてしまった私を押し潰しながらね。」

どんな気分がすると思うかい。倒れて来た、不気味で巨大な生き物に押し潰され、下敷きになりながらも、その脇腹に必死で喰らいついている時、どんな気分がすると思うかい？」

「分りません」

「そうだろうな、私にも分からないんだから」またぞろ紳士は自分の言葉に自分で深く頷いていた。「何しろ押し潰された時に私は死んでしまったのだからね、感慨に浸ろうにも浸れるはずがない。気づいた時には私は、何か深い深い、静かな空間に置き去られ、それっ切りだ。」

その一連の出来事は、ある日の午後、ほんのひと時の間に起こった。空は曇り空だった。と言っても、今の空とはずいぶんと様子の違う空だったがね。色合いも、においも、光の屈折し具合も。」

ヨシコは、自分の頭の上に広がっている茫洋とした空を見上げた。二十一世紀の空の色がそこに在った。一体どんな風になんて変わったのだろう、あの「空」というものは。そして今私が見上げている、あの茫洋とした空も、何千何万年後にはその面影すら失くしてしまうのだろうか。

「しかし腹立たしいのはだな、そうやって私が仕留めた獲物を結果的に横取りされてしまったことだ。首長竜、そしてその下敷きになっている私が呼吸を止めたのを見計らって、木陰に潜んでいた小型の肉食獣たち——私よりも、もっとちつぽけで、喧しい、下司な連中だ——が飛び跳ねながらやって来た。そして奴ら、口々にキャアキャアと喚き散らしながら、私が倒した首長竜の肉をついばみ始めたのさ。まったくつまらない奴らだよ、自分たちでは何も出来ない、ちょこまかと走り回って五月蠅く騒ぎ立てるだけ、誰かのものを盗み取ってはしたり顔でいる、あいつらに食べさせるにはもったいない肉だったよ。」

それで結局、私を得られた取り分と言えば、せいぜいこれぐらいだった——「紳士は膝の上に乗せていた古新聞紙の包みを開き、中身を取り出した。昔ながらの、小さなアルミの弁当箱だった。」

「さて、どんな気分がすると思うかい、我が身が石に代わって行く時には——。砂埃にまみれ、土に覆われ、しなやかだった四肢は硬直し、自慢の牙は輝きを失い、ごつごつとした無機物に変化する。そして、地中に埋もれたまま、歴史から置き去られ、忘れられ——。一体どんな気分がすると思う？」

茫洋とした空の下、紳士は静かな声で話し続けていた。思い思いの服を着た学生たちが、キャンパスを足早に取り過ぎて行く。ヨシコの手ひらの上に乗っている甘栗は、もうすっかり冷めてしまったようだった。

「分りません」ヨシコはそう答えた。

「そうだろうな、私にも分からないんだから」紳士は自分の言葉に自分で深く頷いていた。「しかし、石になって生命の営みから距離を置いてみると、それはそれで気分のいいものでね。すると今度は逆に、自分が肉を身にまとうって地表をうろうろ歩き廻っていた事が、

まるで何かの冗談のように思えて来てね。ひょっとして俺が恐竜として地上をうろつき回っていたのは、夢か何かだったんじゃないか、とすら考えるようになったよ。私は昔からずっと石で、たまたまある日、たった一晚の間にそんな変な夢を見ただけなのではないかとね。」

紳士は脚を組み換え、話を続けた。

「私が地下に潜り込んでからも、地上では相変わらずのどんちゃん騒ぎが繰り返されていた。私の種族はいつの間にか絶えてしまい、後には新興の種族が幅をきかせるようになった。しかしそいつらも時を置かずして絶え、また別の新しい、門脈の悪い連中が台頭して来る……その繰り返しさ。」

それはそれは目まぐるしい世代交代だった。地下に潜りこんで石になってからと言うものの、私は鉱物の時間感覚で過ごしていたから、地上の時間の流れ方をどれほど慌ただしく感じていたことか！

そうこうするうちに、恐竜という存在自体が地上から姿を消してしまった。まるであの激動の時代が幻影だったかのように、すっかり姿を消してしまったのだ。もちろんその時には、私はとつくに恐竜ではなくなっていて、心の臓まですっかり石に成り果てていたよ。しかし、さすがに悲しい思いがしたね。むしろ自分が石になってしまった時よりも、ずっと深い喪失感を感じたものだよ。」

そして紳士は少しの間沈黙した。ヨシコも無言だった。二人の目の前を、テニスラケットを背負った学生たちが声高に喋りながら通り過ぎて行き、その声が静かな午後の空気の中でことさらに大きく響いていた。

しばらくして、紳士は再び口を開いた。

「一体これから何が起こるのかと思っていたら、今度は何と、出産時に子供を卵で包むことなく、そのままで産んでしまう連中が現れた！信じられないほど下品な奴らだ、と私は憤ったものだよ……いや失礼、君の種族もそうだったな。とにかく、地上世界の主導権を握ったその連中は次々と新しい種族に枝分かれしてゆき、仕舞には、君らの種族が出て来たわけだ。それからどんな風にこの地上が様変わりしていったかは、私の理解を超えているね。」

ヨシコは肩をすくめた。その種族の末裔であるはずの私の理解をも超えている、ヨシコは心の中でそう呟いた。

「だが、地下の生活だって地上に負けず劣らず波乱万丈だ。息つく暇もないよ。揺るぎないように見えている大地はしょっちゅう変動を繰り返しているし、タフでハングリーな生き物たちが大挙して住んでいる。ミミズや芋虫がどんなに勇猛でしたたかな連中か、君には分かるまい。君らには想像もつかない世界だろう、地下の喧騒、地下の騒乱など言うものは。」

私の体はいっしょかバラバラに分散し、そのカケラの一つはより深く地下に潜り込み、また別のカケラは地上に押し上げられた。」

「そのカケラの一つを——」

「君が蹴飛ばしちまったわけさ、お嬢さん」そう言って彼は、ハダシの左足を掲げて見せた。「私の左足の爪をね」

ヨシコは頭を下げた。「すみませんでした」取り合えず頭を下げてみたものの、それ以上

どう謝っていいのか見当もつかなかった。

「別に謝ることはない」紳士は鷹揚な態度でそう言った。「掘り返されもすれば、蹴飛ばされもする、それが石くれの運命というものだ。」

そう言うって、紳士は空を見上げた。深い皺の刻みこまれたごつごつとした顔を、茫洋とした色の光に照らしながら、彼は不思議な感慨に耽っているようだった。その感慨の中心は、あと何千何万年もしなければ私には分りやしないだろう、ヨシコはそう思いながらも、彼にならって天を仰いだ。しばらく二人はそのまま、茫洋とした早春の空を眺めていた。

紳士の方が先に視線を戻した。ヨシコはまだ、間拔けな顔付きで空を眺め続けている。そんな彼女が膝の上に大事そうに抱えている小さな紙袋に、彼は目を留めた。

「ところで、それは何だね」

ヨシコは我に返って答えた。「私の食べ物です」

「少し呉れんか」少しばかり幼げな声色を使って、紳士はそう言った。その声色に吹き出しそうになりながら、ヨシコは答えた。「いいですけど、植物系の食べ物ですよ」

「そうか」紳士は少し残念そうな素振りを見せた。「それなら、止めておくよ。なに、私にはこの弁当があるしな」そう言って彼は、小さなアルミの弁当箱に目を落とした。

「——どんな感じでした？」小さな声で、ヨシコはそう尋ねた。

「何がだね？」と紳士。思いがけなく、今度はヨシコの方から話し掛けて来たので、少々びっくりしたような面持でいる。

「何千何年も生き続ける——いや、死に続けているのは、どんな感じでした？」ヨシコはもどかしく言葉をつむぎながら、そう問うた。

「まあ、悪くはなかったね」紳士はそう答えた。

紳士は再び感慨に浸っているようだった。深く皺の刻まれた硬質な手の上には、古びたアルミの弁当箱がぼつねんと乗っている。

「とにかく全てがあつと言う間だったんだ。宇宙が一つ瞬きをするだけの話さ。何もかもが変わってしまったようにも感じるし、何一つ変わっていないようにも思える。余りにも目まぐるしくて、私は何一つ分らずじまいのまま、何千何年も過ごしてきたわけさ」

昼休みも終わり、授業が始まって、キャンパスの中は少しだけ静かになった。その静けさは茫洋とした太陽の光と混ざり合い、ヨシコと紳士の間に柔らかく降り積もっていた。

「だが不思議なのは、あつと言う間に過ぎてしまった長大な年月を構成している、一瞬一瞬の時間の断片——取るに足らない、ろくでもない瞬間の一つ一つが、奇妙にいとおしく思えて来るんだよ。おかしい話さ。そんな、ツメのアカのような瞬間、瞬間を、是が非でも私は自分の中に留めておきたいのさ。だから私は、ずっとそうやってきた。」

紳士は深く、息をついた。

「きつと私は、気が狂っているんだろうね」

風が吹いて来た。ヨシコのマフラーの端が巻き上げられて、くると空中に踊った。

「さて、そろそろ行かなければ」

紳士は立ち上がった。ハダシの左足でアスファルトの地面を踏みしめ、アルミの弁当箱を新聞紙でくると包み込み、昂然と空を見た。

「長々と年寄りの話に付き合ってくれて、ありがとう。何千年後か、何万年後になるかは

分らないけれども、また会えるといいね」

そう言つて、紳士は振り返る事もなく、軽快な足取りで歩き去つて行つた。その時はじめてヨシコは、彼の背中に大きなバラの花が一輪咲いているのに気が付いた。

遠ざかつて行く紳士の後姿は、すぐに茫洋とした空気の中に拡散してしまい、後にはキヤンパスの空虚な喧騒と、車の走る音だけが残っていた。その中に身を沈めて、ヨシコは静かに息をしていた。何千年後か、何万年後になるかは分からないけれども、また会えるといいね——紳士の言葉が、彼女の胸の中を回り続けていた。

さて、私もそろそろ行かなくちゃ、ヨシコは立ち上がり、文学部棟を目指して歩き始める。まだ、研究室には誰もいないだろう。本でも読みながら、他の人たちを待つことにしよう。みんながやつて来たら、「さつき恐竜と会つて、話をして来た」と言ってみよう。普段はこの上なく陰気な彼女が突拍子もなくそんなことを言い出したら、彼らは、一体どんな顔をするだろうか。想像しただけで、笑みがこぼれてきた。

ヨシコは茫洋とした空を見上げた。そして、甘栗の袋を小脇に抱えて、歩き続けた。

ラビュリントスの預言者

——Inspired to Jorge Luis Borges And Hyakken Uchida

入り組んだ階段、何千枚もの真鍮の扉、冷たい石の回廊——それが、わたしを取り巻く風景の全てであった。偏執狂的な幾何学の計算によって構築された、この忌々しい建物——それは一個の宇宙を思わせるものだ。その、まるで騙し絵のような世界の中心で（と言っても、わたしが現在いる場所を便宜的に「中心」と呼んでいるのに過ぎないのだが）、わたしはずっと立ち往生している。一体、わたしの憂鬱が晴れる日は、本当にやって来るのだろうか？

わたしは寝台に身を横たえ、煮詰まった考えをもう一度煮詰めている。寝室の壁に埋め込まれた鏡に、わたしの姿が映っている。身を支えるのには些か華奢すぎる四肢——それは痩せた牛の脚だ。薄茶色がかった背中の毛並み——それもまた、牛のものである。そして長らく太陽光線を浴びていないため、病的な程に青白い顔——これは、年端もいかぬ人間のものだ。痩せ牛の体躯に、貧相な人間の頭が生えている——それがわたしの姿である。

わたしの母親は、かつてポセイドンの呪いによって白い雄牛に恋い焦がれるようになり、そして一頭（一人？）の怪物を産んだ。「雷光」を意味する「アステリオン」なる荘厳な響きの名前を与えられたその息子は、牛の頭を持ち、人の頭を持っていたという。すなわち、わたしの兄である彼は、わたしと丁度正反対の身体的特徴を有していたのである——わたしは頭が人間、体が牛である。

荒くれ者だった兄は成長するにしたがって周囲の人間たちを悩ませるようになり、ついには宮殿に幽閉されることになった。その宮殿はダイダロスなる職人に特別に作らせたもので、一度足を踏み入れれば二度と出られない複雑怪奇な構造を持つ建築物であった。

人肉嗜好者であった兄の食料として、九年に一度、男七人・女七人・計十四人の人間が宮殿の中に押し込まれた。兄はその人間たちを無残に喰い殺したという話だ。しかし三度目の生贄の中に、アテナイから来たテセウスという男が紛れ込んでいた。彼は兄を退治すべく宮殿に乗り込んだのだった。

死闘の末、わたしの兄はテセウスの剣に倒れた。そしてテセウスはと言うと、長い糸を道しるべとして用い、無事に宮殿から脱出することが出来たのだった。その糸を提供したのが、他ならぬわたしの姉、アリアドネであった（彼女は我々の兄弟のうちでは珍しい、純潔の人間であった）。

時が経ち、そんな物語もありふれた英雄譚、耳に馴染みのよい伝説として語り継がれるようになり、二十八人もの生贄を喰い殺したわたしの兄も単なる「かませ犬」として人々の記憶に留まるようになった。しかし、このおぞましい歴史はまたぞろ繰り返されようと

していたのである。わたしの母親——いや、その女のことを「わたしの母親」などと呼ぶことはもう止めよう。わたしは彼女を母として慕ったことなど一度足りとも無かったのだから——王妃パシパエにとつて、この悲劇はまだ完結していなかったのである。

パシパエにかけられた呪いはすでに消滅していた。しかし、白く美しい雄牛との燃え上がるような恋——それはポセイドンの偉大なる力も手伝っていたせいかな、あるいは禁忌の愛であることが作用したのだろうか、彼女がそれまでの生涯において経験してきたどの恋愛よりも烈しく、狂おしく、情熱的であつた——その特別な恋の記憶は、彼女の心臓の奥深くにしっかりと刻み込まれていた。呪いから覚めたパシパエは、自分が牛頭人身の忌まわしい怪物（わたしの兄だが）を産んでしまったこと、そしてそのため多くの人間たちが生贄としてその命を無下に奪われてしまったことに恐怖を覚え、深い自責の念に苛まれたものである。しかし、そんな彼女の殊勝な後悔も、あの倒錯した幸福の記憶に比べれば微々たるものであつた。パシパエは陶然として思い起こすのであつた——自ら牛の模型の中に身を潜め、美しき白い雄牛に近づき、初めて睦まじく語り明かした夜、あの運命の夜のことを。パシパエは、その甘美な記憶の再現を渴望した。偉大なるポセイドンの呪いよりも根深く恐ろしいもの、それは一人の薄弱な人間の恋情だったのである。そしてついにある寝苦しい夜、パシパエは再び模型の中に潜り込んだのであつた（余談だが、その模型を作つた職人は他ならぬダイダロス、兄を幽閉した宮殿を建造したあの男である）。

その結果として、わたしが生まれた。わたしは兄とは違つて大人しく、決して暴力など振るわなかつた。また、兄の肉嗜好（恐らく、彼が疎まれた最大の理由がこれであろう）も、わたしには受け継がれなかつた——それ以前に、わたしは「何かを食べる」という行為それ自体に無関心であり、不可思議なことに何も食えずにいても空腹を感じず、飢えもしなかつた。

しかし、わたしの父およびパシパエは、わたしに恐怖の念を抱いていた。兄の時のトラウマが、彼らの内に甦つたのだ。またしても化け物が生まれてしまった——頭が人間、体が牛などという、不愉快極まりない怪物が。

そしてわたしは先例にのっとり、宮殿に幽閉されることになつたのである——わたしは糸玉を持つていないかどうか嚴重にチェックを受けた後、かつて兄が暮らしそして死んだ場所である、あのわけのわからない構造の建物に押し込められたのだった。

わたしは一切抵抗しようとしなかつた。わたしは兄とは違つて血の気の少ない方であつたし、わたしを取り巻いている無情で無慈悲な人間たちと争うなど、この上なく無益なことと思われたからだ。それに、人間たちの間に在つて、謂れのない避難や侮蔑を受けながら生きてゆくよりも、完全に世間から隔絶されて暮らす方が、よほど気楽であるようにも感じられた（わたしはかなり幼いころから厭世家だったのである）。わたしは——幾分引きつてはいたものの——顔に微笑みを浮かべ、どうどうと迷宮の中へ入つて行つたものである。それがわたしと人間界との訣別であり、以後わたしは今に至るまで外に出たことがない。

こうして先例通りわたしは宮殿に幽閉され、そして先例通りに生贄が捧げられることになった。だが前にも述べた通り、わたしは人肉嗜好を持たないばかりか、食事の習慣すら持っていなかった。そこでわたしは生贄の一团が到着するなり、慈愛に満ちた微笑みでもって彼らを迎え、彼らを安心させるためこのように告げた——君たちを傷つける気は毛頭無い。ましてや喰い殺す気など全く無い。

しかし、これは完全に無駄な宣言であった。彼らは二度と戻れぬ迷宮に放り込まれたことへの絶望感と、おぞましい姿の怪物を目の前にしたことへの恐怖感からすでに発狂状態にあり、わたしの話をまともに聞こうという者など皆無だったのである。ある者たちは蜘蛛の子を散らすように逃げ惑い、ある者たちは泡を噴き出して失神した。中には、「そうやって油断させておいて喰う魂胆だろう、お前みたいな醜い化け物の言うことなど、信用出来るものか！」と悪態をつき、おぞましい半獣半人に殺されるぐらいならいっそ、と言わんばかりに自ら舌を噛み切り、絶命する者さえいた。

わたしは絶望した——おそらく、生贄たちの感じているそれと同じくらいに。わたしは長い時間をかけて宮殿の中を巡り、逃げ出した生贄たちを探して回った。階段で足を滑らせて頭から転落し、命を落としている者もいた。行き止まりの壁を殴りつける恰好のままでは息絶えている者もいた。錯乱のためか、はたまた食料の無いこの宮殿において、最後の手段を用いて飢えを凌ごうとしたためか（かつてわたしの兄がそうしたように）、互いに傷つけ合い、噛み付き合いながら倒れ伏していた者たちもいた。わたしは彼らの亡骸を発見する度、脊髓が凍てつき、全身に鳥肌が立つ思いがした。話に聞かされていた兄のおぞましき、そしてわたし自身のおぞましきと比べ、決して劣っているように思えないほどにおぞましい光景が眼前に展開していた。それも、直接手を下してはいないとは言え、わたし一人のせいで現出した地獄絵図なのだった。

意図していなかったとは言え、幾つの命を奪ってしまったことだろう。結果的には、わたしは兄と同じ所業をしてしまったことになる。背徳に対する恐怖が、わたしの中に湧き上がって行くのが分かった。

何故わたしは生れて来たのか。見ず知らずの他者を不幸にし、そして自分自身をも不幸にするためなのか？生贄たちの打ちひしがれて青ざめた顔——それはあつと言う間に腐食し、そして干からびていった——を見遣りながら、わたしはいつ果てるとも無い思弁の闇の底へ沈んで行くのであった。

十四人の生贄全員が息絶えてから、どれぐらいの月日が流れただろうか。ある日、わたしはいつものように思弁の闇の中を漂っていたのだが、ふと脳髓に疲れを感じて眠りに落ち、そして夢を見た。それは身の毛もよだつような悪夢で、直にわたしは自分の叫び声によって目を覚ます羽目になった。止めどなく噴き出る冷たい汗で凍傷になるかと思いがら、わたしはその恐ろしい夢を頭の中で反芻した。そして突然、つい先程まで続いていた

思弁の答えが見出されたことに気がついた。

わたしが見た夢というのは、今からそう遠くない未来におけるこの世界の姿であった。それが何時のことかはわからない、しかし、いずれ必ず起こるだろう凶事の顛末をわたしは眠りの中で目撃したのである。わたしは心臓の痙攣を必死で押し止めながら、自分がこの世に生を受けた理由を悟った感動と、果たすべき我が使命への畏怖の念をどうにかして自分の中に位置付けようと躍起になっていた。わたしは宇宙の宣託を伝えるため、預言者としてこの世界に生を受けたのだ。

問題は、どうやってこの夢を人々に伝えるべきなのか、この強靱にして複雑怪奇な宮殿の外に住む、幾千億という人々に――。最初は、自ら外界に赴くことを試みた（よくよく考えてみれば、この迷宮から脱出しようとしたのはその時が初めてであった）。しかしそれは徒労に終わった。三日三晩わたしは宮殿の中をぐるぐると歩き続けたものの、四日目にとある真鍮の扉を押し開いた時、わたしがいつも暮らしている馴染みの寝室に行き着いてしまった。わたしは疲労と失望に押し潰されて寝台に横臥し、やはりこの計画には誰か他の者の助けが必要不可欠だと確信した。すなわち、次に生贄としてやって来る一団に協力してもらい、みんなで出口を探すより他はない。

わたしは生贄たちがやって来るのを渴望した。渴望しながら過ごす時間は途方も無く長く感じられた。永遠という概念を凌駕するほどに、その時間はだらだらと続いた。どれほどの歳月が流れたことだろう。その倦怠と焦燥の心情を、わたしはどうしても言い表すことが出来ない。

長く苦しい忍耐の後、ついに、運命の日が訪れた。

わたしは前回の失敗によつて得た教訓を生かし、まずは自分の姿を曝すことなく、壁の向うから彼らに呼び掛けてみた。これは一定の功を奏した。人間というものは、目に映る醜さを認めた途端にもう正常な判断が出来なくなってしまうものの、しかし醜さが巧妙に隠されていれば、彼らはそれなりに落ち着いた態度でもってわたしと向き合えるようになったのである。

わたしは壁越しに彼らと対話した。彼らに詫び、彼らを慰め、その絶望に共感し、そしてわたし自身もまた犠牲者であり、彼らと同じような境遇にいるということを切々と訴えた。それは非常に根気のいる対話だったが、わたしの怪物らしからぬ誠実な態度や、空間の閉塞性や癒しようなない孤独感もあいまって、我々の間には壁越しに一種独特な信頼関係が生まれ始めた。

ある日、生贄たちは「こつちに来なさいよ」とわたしに呼び掛けた――わたしはやや躊躇した後、彼らの前に姿を現した。彼らはわたしの容貌を見て少なからず衝撃を受けていたようだが、同時にわたしを温かく迎えるつもりでもいるようだった。

わたしたちは彼らに感謝し、そしてとうとう予言を伝える決心を固めた。「ぜひとも貴方たちに聞いて頂きたい話がある」

わたしが凶夢の一部始終を語り終えた時、彼らは狐につままれたような表情をしていた。

無理もない話である。しかし最終的に彼らはわたしを信じ、いつか宮殿の外に出られたらば、必ずこの宣託をあまねく全ての人々に伝えると約束した。

「では、行こう」わたしは高らかに言った「手分けして出口を探すのだ、同胞よ」

こうして、受難の旅が始まった。我々は大ざっぱに三つのグループに分かれて、慎重な足取りで前進した。階段を上りそして降り、重たい扉を開き、回廊を歩き回り、調度品や壁に掛けられた絵によって隠されている抜け穴をくぐる――。狭苦しい通路だらけのこの宮殿は、広大な砂漠を思わせた。預言者としての使命感に燃えて出発した我々だったが、次第に重苦しい不安の影に肩を押さえ付けられるようになっていた。このままわたしたちは宮殿の中を堂々廻りしながら死んでゆくのだろうか。そして、よしんば外に出られたとして、この預言は受け入れられるのだろうか。一体、我々の背負ってしまったカルマが尽き、何らかの形で報われるような日が、果たして本当に訪れるのだろうか――。

一人、また一人と、飢えと疲労のため倒れる者が出て来た。しかし歩みを止めたところで、食料の無いこの宮殿の中にある限り、間近に迫っている死から逃れられる訳もなかった。その上、彼らの中には殉死の精神すら芽生えており、休むことなくがむしやらに前進を続けるのだった――そして力尽き、倒れてゆくのがあった。

やがて、わたしのグループは全滅した――わたし一頭を除いて。

残り二つのグループは、そう遠くないところで見つかった。みな一様に、命の炎が燃え尽きてしまっていた。

最後の一人の死体を宮殿内で発見した時、わたしは思わず一粒の涙をこぼした。生まれて初めて流した涙であった。わたしが生れて初めて流した涙は、わたしが生まれて初めて心を通わせた友人の最後の一人の上に落ち、そして蒸発していった。

再びわたしは、思索に耽る日々を送るようになった。自らの心臓の鼓動と息遣いの他には何一つ音のしない、歪められた静寂の空間の中で、わたしは自分を相手に対話が続けていた。――これは答えの出る対話であるのだろうか？――わたしは、どう落とし前をつければよいのであろうか？――何がわたしを生み出した？何故わたしは生れた？わたしは何者？――わたしは預言者？

クエスチョンマークを並べるうち、次第に、一つの像がわたしの中で形作られ始めた。それはわたしが本気で求めている者の姿であった。その像が何者なのか、直に知れた――わたしは、糸玉を手にした英雄を待ち詫びるようになったのである。すなわち、一度宮殿に入った後で、再び外の世界へ戻って行ける人物――かつてわたしの兄を殺したテセウスの再来を、わたしは渴望しているのだ。

歴史は繰り返す、と言う。わたしは、いつの日か必ず彼がやって来るだろうと確信している。そして、十分に理解している積りだ――彼の来訪が意味するものは、わたしの死に他ならぬことを。しかし、わたしは死を恐れない。恐れるに足りないのである。わたしは、もっと恐ろしいものと向き合って日々を生きているのだから。

片手に剣を、そしてもう片方の手に糸玉を持った英雄が、わたしの寝室に乗り込んで来た時——わたしは喜んで彼を迎え入れるだろう。そして、その剣さえも甘んじて受け入れよう。しかし、わたしの喉がわたしの血で塞がれてしまう前に、かの英雄に預言を伝えることだけは、必ず為さねばならない。もしそれが上手くゆけば、わたしは彼の帰り道——糸を巻き取りながら進む、孤独の旅路——の安全を祈りつつ目を閉じるだろう。その時、ようやくわたしは満ち足りた気分ですり込みに就けることだろう。その日が来るのを、わたしは心待ちにしているのだ。

※補記

ボルヘスの短編小説「アステリオーンの家」を換骨奪胎し、ギリシアのミノタウロス伝説と我が国のくだん伝説を融合させる——このアイデアは、久しぶりに『不死の人』を読み返していた時に唐突に思いついたものである。大まかな構想をまとめる段階では少々手こずったものの、いざ書き出してみると筆が止まらなくなった。それは素晴らしい体験だった。ボルヘスがヒントをくれたおかげであろうか。

新宿貧血綺譚

新宿駅西口の、昔ながらの飲み屋街——焼き鳥屋だの居酒屋だのがひしめき合い、雑多なおいと人々の営みの熱気がむせ返るように立ち込めているのだが、その中の一角に「馬鹿で阿呆でフラメンキン」なる料理を出す店があると聞いて、私はこのこの新宿くんたりまで出かけて行ったのである。

ここでまず「馬鹿で阿呆でフラメンキン」について少々解説を加えておこう。これはベークンを薄切りの牛肉でぐるぐる巻きにして油で揚げたもので、一種の天ぷらである。見た目は衣の薄いロール・カツのような風情で、練り芥子をつけて食す。



では、何処ら辺が馬鹿で、かつ阿呆なのか。

そもそもフラメンキンというのは、スペインは南コルドバの郷土料理なのである。そして馬鹿 (Baca) と阿呆 (Ato) は共にスペイン語、前者は「牛肉」の意、後者は大蒜の意である。その昔、この店で働いていたスペイン人のコックが、故郷の名物料理をアレンジして出したのがそもその始まりだという話だ。

これがなかなかの人気メニューで、常連客はもとより、その珍奇な名前を耳にしてやって来るB級グルメ愛好家たちもこぞって注文するため、しばしば売り切れの憂き目に遭う。事実、私は最初にその店を訪れた時、それは確か二時過ぎ頃、お昼時を若干過ぎてしまったものの、まだランチを食すには遅すぎるという事は無い時間だったのだが、ものの見事

に売り切れていた。傷心の私はもう一つの人気メニュー、ソイドンとトンカツを注文し、自らを宥めたものだ。

（訳注）どうやら、またぞろ説明が必要な語句が出て来たようである。ソイドンとはカレー味の豆の煮物を白ライスの上にかけて、仕上げにハムを一枚添えた丼物である。早い話が、豆カレー丼と考えていただければいい。ソイは大豆（Soy）、ドンは丼である。



一方トンカツは、誰もが知っているトンカツである。豚肉と言うよりは何かのすり身のような肉が、なぜか無性に郷愁をそそる。

しかしトンカツをもつてフラメンキンの代用とするのは、やはり無理があった。次回こそは是非ともフラメンキンを、必ず、と私は心に誓ったものである。

その次の休日、今度こそは喰いはぐれまいぞ、と私は開店時刻を狙って店を訪れた。

「フラメンキン出来ますか」

「はい、出来ますよ」愛想のいい店員が浅黒い顔に笑顔を浮かべて答えた。

私は喜び勇んで注文した。ついでにソイの頭と、芋焼酎も追加して――。

（訳注）ソイの頭、というのは、ソイドンの具のみを一品料理として出しているもので、酒の肴にするとなかなか乙である。それにしてもさつきから食い物の説明ばかりで話が少しも前に進まない、私は別にグルメ記事を書きたかった訳では無いのに。

もう安心だ。私はカウンターに頬杖を突いて、すぐに出て来た芋焼酎（溢れるほど思い切り満タンにされたコップが、受け皿変わりの茶碗の上に乗っていた。一種の枅酒である）をちびりちびりと飲みながらソイの頭をつまみ、フラメンキンの到着を待った。店が開いてまだ数分しか経っていないのにも関わらず、すでに店内は満員になっていた。そしてまるで日が落ちた後の居酒屋のように、一同こぞって酒を飲み始める。太陽はまだ天空遙か高くで燦然と輝いていると言うのに、全く素晴らしい光景だ。やはり昼から飲む酒は旨いものだ、と、私はすっかり上機嫌になったものである。

暫くそうやって機嫌よく焼酎を啜っていたのだが、ふいに私の隣から「ねえ、このお兄さんのフラメンキン、まだ揚がらないの？」と声がした。見ると、作業着を着たやや中年ぶとりの男性が私を指差し、店員にそう催促しているのである。店員は「あいすいません！すぐお持ちします」と、やっぱり威勢のいい声で答えた。

男性は私の方を向き、「いやあ、こういう店は、さつさと料理が出て来てこそそのもんですからねえ」と、存外に丁寧な言葉遣いでそう言った。古めかしい黒縁眼鏡を掛けた彼の顔つきには、古書店などでよく見かける類いの、市井のインテリゲンチヤといった趣があった。私は、自分の食べ物の催促をしてもらったこと、それから、見知らぬ年上の人から懇慫に話し掛けられたことで恐縮することしきりであった。幸い、そのすぐ後に無事にフラメンキンが運ばれて来たのと、焼酎のアルコール分とが私の緊張を和らげてくれ、暫くすると私はこの男性と親しく話を始めた。見知らぬ人といつの間にやら仲良くなって酒を飲み、他愛も無い世間話をするのは、場末で酒を飲む際の醍醐味である。

そうやって雑談をするうち、その丁寧な口調で話す男性が高所作業員であることが分かった。高所作業！それは凄いと私は感嘆した（高所恐怖症の私にとって、この職業に従事する人物はまさに驚異の存在であった）。しかし、高所作業について何らかの話をすることと思いきや、彼は専ら献血について情熱的に語り始めたのである。

昼下がりの大衆食堂で、高所作業員の中年男が献血の話を繰り広げている——考えてみれば、いや、考えてみなくとも奇妙な光景であるが、別に私は不審には思わなかった。というのも、この高所作業員のように献血を趣味としている人間が、私の知り合いに何人もいるからである。高校時代の同級生に一人、行きつけの床屋に一人、遠縁の親戚に二人……世間には意外にも多くの献血愛好家が潜伏しているのか、はたまた私の周辺だけに偏在しているのか、それは分からないが。とにかく、私は彼らに割と好印象を持っているのである。

往々にして博愛主義者やボランティア関係者などの中には、自分の善行を自慢したがる人間、もっと言えば、自慢したいがために勝手な親切の押し売りをし、悦に入る迷惑なナルシストが多いものである。だが、献血愛好家たちは、献血という立派な社会貢献行為・慈善活動を行いながらも、先述したようなナルシズムに陥ることなく、ストイックに生きている者が多数である（※あくまで私の主観では）。即ち、彼らは「いやあ、今日も五百シ

ーシーばかり寄進して来たよ。おかげで貧血になっちまったけれど、それでも善いことが出来て何よりだよ。君も血の通った人間なら献血ぐらい行きなよ、血だけに」などと言うような話まらぬ自慢をしたりしないのである。

では彼らは何が幸せで献血に行くのかと言うと、彼らは献血と言う行為それ自体を娯楽と見なしているわけである。ある献血愛好家は（私の親戚だが）、自分は血の気が多く血圧も高い体質だから、定期的に献血に行って血を抜いてもらうと、身体の具合がよくなる気がするのだ——などのたまう。或いは、血を抜かれるのって気持ちいいのよ、あの快感ってちよっと他に求められない、最高ね——などと言う者もいる（私の中高時代の同級生なのだが）。また、これは献血愛好家の中でもやや変化球なのだが、献血ルームの充実を魅力として挙げる者もいる。献血ルームはいいぞ、おやつやコーヒーも無料で飲み食いできるし、漫画なんかも置いてあって、ソファに坐ってゆっくりくつろげるんだ。暇な日のお茶の時間なんかには献血に行くに限るよ、と行きつけの床屋が私のモミアゲを剃りながら語っていたことがある（この話には私は結構惹きつけられたものだ）。

このように、彼らは献血の素晴らしさについて、まるで野球ファンが野球の話をするように、あるいは映画ファンが映画の話をするように、生き生きと心底楽しそうに語るわけである。高所作業員もまた、そうであった（彼はどうかやら、床屋と同タイプであるようだった）。

彼の献血にまつわるよもやま話、雑学は、たいいて聞いたことがあるものばかりだったが、その中に奇妙に私の心にひっかかる物語が含まれていた。それをざっとここに書き留めておきたい。

※※※※※

そう言や、何時だったか、こんな事もありましたよ。その日は夕方から仕事の予定が入っていて、日中は暇だったんです。それで僕は、せっかく時間もあるのだから、久しぶりに献血でもしに行こうと思いついたんです。まあ、仕事前に献血するというのが、体の事を考えると、果たしていいことなのかどうかは分かりやしいですがね——特に、いつも神経と体力をすり減らす仕事をやってる我々にとってはね。でも自慢じゃないけれども、僕は貧血で他卒倒したことなんか一度だってないし——それ以前に、献血したすぐ後に仕事をすることなんて、僕にとっちゃあ茶飯事なんです。少々血を抜かれていたって、安全ベルト一本あれば、高層ビルの上の方で風に煽られようが揺さぶられようが、へとも思いませんよ。

そんな訳で僕は献血ルームに寄って、牛乳瓶二本くらいの血を採ってもらったわけです。それで採血の後に待合室の椅子に腰かけて、食べ放題のドーナツなんかをもそもそ食っていたんですが、不意にドアが開いて、まるでカイワレ大根みたいなヒョロヒョロした兄ちゃんが入って来たんです。どうも見覚えのある顔だな……なんて思いながら

その兄ちゃんの顔を見ていたら、まあ世間は狭いもので、それは最近うちの会社に入ったバイトのQでした。

さてそのQですけどね——この話の、まあ言ってみれば主人公みたいな奴なんですけれど、あいにく僕は彼の素性をよく知らない……。知っているのは、地方から出て来て、都内の大学で映像か何かの勉強をしている、っていうこと位ですかね。いつも脂でべたべたの長い髪を鬱陶しそうに垂らして、不精髭を伸ばし、小汚いTシャツとジーパンを着ている、これと言う特徴のない男です。極端に無口だったんで、僕が何やかやと気さくに話しかけて色々尋ねてみても、ぼそぼそと二言三言、お茶を濁すように呟いたきり、黙り込んでしまうんで、どうしようもないんです。

「おう、Qじゃないか」僕は彼に声をかけました。

「ああ、どうも」Qは僕に気づくと、くぐもった声で返事をしました。

「こんなところで奇遇だなあ。お前も献血をするのかい？」

「はい」

「その、大丈夫か？お前もこの後は、現場で仕事だろう？」僕はふつふつと不安が沸き上がって来て、そう尋ねました——というのもQという男は、実にひ弱そうな身体つきで、さつきも言った通りカイワレ大根みたいな奴だったんで、献血なんかした日にはぶっ倒れてしまうんじゃないかと、僕は半分本気で心配になってしまったんです。しかしQは青白い顔で「大丈夫す」と言ったきり、取りつく島もありません。そして消毒液の匂いがプンプンする部屋に入って行きました。

思えばその時、Qを止めておいた方がよかったのかもしれない。と言うのもその夕方、Qは作業中にふらっと倒れ込んで、危うく地上五十メートルの高さから落下しかけたんですよ。幸い命綱があったんで、大事には至らなかつたんですが……。不注意とかで足場を踏み外したのとは明らかに違う感じだったらしく、皆「一体どうしちまつたんだ、Qの奴は……。」「と首を傾げていました。

その話を聞いてすぐに僕は、昼過ぎに献血ルームでQと遭遇したことを思い出してね、ああ、やっぱり！と合点が行ったんです。僕は何故だか自分がQを殺しかけたような罪悪感に苛まれながら「実は今日ねえ、Qの奴が、仕事前に献血をしたのを見かけたんだよ。きつとそのせいで貧血にでもなったんだろう。注意しておいてやればよかったなあ」と、まるで懺悔でもするような心持で皆に話をしたんです。すると皆は、ああそうだったのか、あいつひ弱そうだからなあ、と口々に漏らし、すっかり納得していました

しかしこの解釈に一人、反対した人間がいました。仕事場の鼻つまみ者だった、赤ら顔の現場監督です。

現場監督は真っ赤に焼けた顔の顔色一つ変えずに、「いや、多分貧血じゃあないな」と言うんです。

「おれはアイツが落ちる所を見ていたんだが、あれは貧血で倒れた人間の倒れ方じゃあな

かった。アイツは自分から落ちたんだ」

そりや、みんなキョトンとしちゃいましたよ。言うにこと欠いて何を言い出すのかと。しかし監督は大真面目に話を続けます。

「おれはハタチぐらいの時に、飛び降りの現場を見た事があるんだ。その頃住んでいたアパートの屋上から身を投げた阿呆がいてなあ。あれは一瞬の出来事だったが生忘れられない。」真顔でそんな事を言い出したんです。「ちようど、Qの奴とそっくりな落ち方をしていたよ」

無論、監督の言っていることには何の根拠にもなりません。Qが落ちそうになる様子を見て、昔の記憶が、「フラッシュバック」って言うんですかね、突然に蘇って来たから、その投身自殺者とQが重なって見えて、そんなことを思ったのかもしれない。

Q自身はと言うと、その時の事はよく覚えていない、と言うばかりでした。何処となくモヤモヤとしたものが残るものの、やはり貧血で気を失ったのだろうということとその話は落ち着きました。その後Qは半年ほど何事もなかったかのように僕らと一緒に働き、そして「実家に帰るので」と言い残して辞めて行きました。今はどうしているのか、僕は知りません。

(私は、「Qは、**本当に**貧血で足場から落ちたんですか？」と尋ねた。)

さあ、本当のところはどうだかわかりませんね。僕自身も現場監督の言う通り、Qは自分から飛び降りたんじゃないかと思っている部分もあるんです。でも、なんでそんなことをしたのかは分からない。ひよつとするとQ自身も分かっているかも知れないし。

ただ事件の真相はともかくとしてね、Qが仕事前に献血をしたということが、結果的にはかっこのアリバイになったということです。取り合えず矛盾なくそれらしい説明がつけば、皆にとってはそれで充分だったんですね。

※※※※※

フラメンキンは大蒜の風味よりも寧ろ塩味が効いており、練り芥子をつけて食べると非常に美味かった。私は高所作業員の話を聞きながら、そのぐるぐると圧縮された肉料理を食べ続けた。昼間から体内に充満したアルコールが、丁度いい具合に私の脳髓を痺れさせているように思われた。

私がフラメンキンを食べ終えた時、ちようど高所作業員の話も一段落したところであった。私は金を払い、彼に別れを告げて店の外に出た。見知らぬ人間と呆気なく朋友となり、そして呆気なく別れるのもまた、場末で酒を飲む際の醍醐味である。

狭い路地を抜けるとそこは幾何学的で金属的な都市風景が広がっており、空を突き刺すようにしてビルが乱立していた。その無数の建物のテッペンを眺めながら私は、ふとあの

上から落ちてしまうことだってきつとあるんだろうな、と思った。

地涌菩薩

ある時、釈尊はマガダ国の首都、ラージャ・グリハ（王舎城）に聳え立つフリドラクータ（靈鷲山）の山中に座し、その周りに集った幾千幾万の弟子たち……出家者、在家者を問わず、ありとあらゆる階層に生きる求道者たちに向って法を説いた。

釈尊はまず広大な宇宙の統一的な根本原理を巧みな譬と詩句を持って語り、そして続いてその目を娑婆世界に向け、求道者たちが現実において実践的に活動する「菩薩行」の重要性を説いた。はじめ、シャーリ・プトラ長老の三度にわたる請願を受けるまでは語ることを躊躇していた釈尊も、一たび語り始めればその言葉は止まることなく溢れ、ダルマの輪を回し続けるのであった。

そしていつしか、広大な宇宙の中に存在する諸々の次元の世界からも菩薩たちが集って来た。彼等は釈尊の言葉に感銘を受け、是非我々もこの娑婆世界をあまねく巡り、今しがた説かれた法を伝えて回りたいと申し出た。

しかし、釈尊はその申し出を拒絶した——「止めよ」

他の世界から来た菩薩たちは、おのおの世界で法を広めればよい。何故ならば、娑婆世界にはすでに多くの修行者たちがおり、彼等こそが私の真の弟子なのである——釈尊はそう語った。

その途端、この娑婆世界に、地響きとともに巨大な亀裂が生じた。そして大地の割れ目から、幾千幾万という数の求法者たちが現れ出て来た。彼らは金色の身体を持ち、三十二の吉相を備えていた。たちまち世界は、その数を計算することも比較することも、喻えることすら出来ないほど夥しい菩薩たちで埋め尽くされてしまった。見渡す限り、いちめんにひしめき合っている聖者たちの出現を目の当たりにして、釈尊を取り巻いていた如来達、そして他世界の菩薩たちは驚愕の色を隠せなかった。

数え切れぬほど多くの求法者たちは、世界を分断する長大な亀裂から飛び出して来るなり、それぞれ多種多様な讃嘆の言葉でもって釈尊を称揚し、恭しく敬礼した。こうして彼らが次々と礼拝をおこなううち、実に五十小劫の歳月が過ぎてしまった。菩薩を取り巻く如来達、そして他世界の菩薩たちは、その様子を黙り込んで眺めていた。五十小劫という時間は途方も無いものであったが、それでも彼らにとってはまるで半日の長さにしかなじられなかったのである。

こうして法華経「從地涌出品」は幕を開ける。その情景は、沢山の忘れ難い場面の

頻出するこの經典中においても、最も印象につよい挿話であるとわたしは考えている。

素直にこの挿話を読む時、我々がまず感じることは、聖者たちが事もあろうに地面を突き破って出現するということの意外性であろう。天上を聖なるものと見なし、地下を聖ならざるものと見なすのは、どの時代やどの地域においても普遍的な概念である。聖なる者は天界に住し、聖ならざるものは地下に住する——天界と冥界という対比は、古今東西、数多くの神話において見られる世界観である。ところが、この挿話においては、そのオーソドックスな世界観が見事に覆される。仏教の諸經典においても、このような菩薩たちが登場するのは、法華經以外には見当たらない。

そこに如何なる寓意を読み取るか。(奇跡として書かれた話が何のメタファーとなっているのかを解釈する行為が、この経を読む上で書かせぬ作業であることは言うまでも無い。何しろこの経には「譬喩品」という題名を持つ章まで存在するほどであり、たとえを読み解くことの重要性は、經典中において幾度となく繰り返し示唆されているのである。)

ある仏教学者は、これは市井において生活し、俗人たちと交り暮らしながらも、俗にまみれることなく精進を怠らぬ求法者たち——実社会において実践的な活動を行う修行者たちを象徴しているのだ、とした(わたしも概ね、これと同意見である)。

また、ある大昔の革命家は、これを抑圧されながらも信念を貫いて生きるプロレタリアート達のメタファーであると解釈したりした(經典すらも「階級闘争の物語」として読んでしまうのが、さすがは革命家と言ったところか)。

いずれにせよ、突如として地割れから出現する菩薩たちは、天界から降りて来る天使たちとは、一線を画す存在であることは容易に理解されよう。オーソドックスな神話の者とは対極にある菩薩たち——しかも釈迦は、彼らこそが真の弟子であるとする——それが我々の眼前に登場するのである。

さて、釈尊を取り巻いている如来たち、そして他世界から来た菩薩たちは、地中から出現した途方も無い数の菩薩たちを見て驚愕する。驚愕の要素は(少なくとも)三つあると言える。まず一つには、地面を突き破って何者かが出て来るだけでも、十分に意外な事である。二つ目に、その数が、六十のガンジス河の砂の数に等しい幾数万億というものであり、たちまち世界が悉く菩薩で埋め尽くされてしまったことである。そして彼らは、新たに地中から出現した菩薩たちに関し、俄かには理解し難い三つ目の点について釈尊に尋ねた。

「師は先程、大地の裂け目から現れ出たこれらの菩薩たちは、みなご自分の弟子であると仰せられました。しかし、人間がこの世界に滞留出来る時間と言うものは、ほんの僅かなものにしか過ぎません。師はそのほんの僅かな時間の中

で、一体どのようなにしてこれだけの数の求法者たちを悟りの道へ導かれたのですか」

釈迦はその問いに答える。

「実は、私は遙か過去において、とうに解脱していたのだ。それから今現在に至るまでの永い永い時間の中で、私は姿を現しては消え、消えてはまた現れることを繰り返しながら、実にこれだけ多くの菩薩たちに法を説き続けて来たのだ」

——と、実はここまでの話は、この經典中において、莊大なる「前説」なのである。

そう、この途方も無い「從地涌菩薩品」は、あくまで伏線なのだ。では、何の伏線か？それは次章で語られる、釈迦の永遠性に関する話である。

すべてが移ろう、無常という概念が根底にある仏教において、「永遠」なる概念が登場するのは奇異に思われるかもしれない。そこで、この「釈迦の永遠性」を「法の普遍性」という言葉に置き換えたい。

仏教の根本にあるものは、人格を持つ神的存在ではなく、あくまで「法」であり「教説」である——その思想を強く述べているのが、この法華經と言える。法華經自体が、その中でさかんに法華經を賞賛しているのも、このためではなからうか。（無内容説について）。すなわち法華經は、得体の知れぬ神ではなく、「法」「教え」そのものに帰依せよ、というメッセージを繰り返し、折に触れて喧伝しているのである。それが、この經典が一見したところでは無内容に思える一因となっているのであろう。

しかし、ここで念頭に置いておかなければならないのは、そもそも法華經は釈迦という「歴史的人物」すなわち「人格的存在」についての話題から始まっているという点である。

釈迦の入滅後、残された信徒たちによって多くの教義が生み出され、細分化し、また多くの仏が生み出され、仏教が多種多様化し、混沌とした状況に陥った。法華經は、その混沌を打破すべく、もう一度「歴史的な釈迦」に戻るところから出発した。そしてその行程をたどるうち、いつしか「歴史的人物としての釈迦」を離れ、「法／教え」こそが核である、という結論に達したのである。これはパラドキシカルな展開に感じられるかも知れない。しかし法華經が、「歴史的人物」としての釈迦が靈鷲山で「法／教え」を説く、という挿話から幕を開けていることを考えれば、初めからすでにこの二者は矛盾することなく併存している、と言えるかもしれない。

ここでもう一度「釈迦の永遠性」とは何か、という問いに戻ってみる。釈迦は、人知の及ばないほどの遙か昔に既に悟りを開いていた。そして未来永劫、不滅の存在である。釈迦は現世において寿命が尽きたかに見えたが、これは方便に過ぎない。そう

やつて釈迦は繰り返し繰り返し娑婆世界に現れては消え、現れては消えているのだ——次章においては、そのような事実が述べられる。これを如何に読み取るべきか。

釈迦以前にも、教を説いた先達たちは存在した（その弟子たちが、他ならぬ、地割れから出現した菩薩たち、過去世界のあらゆる時代において修行を重ねていた求道者たちである）。そしてこれから到来する時代においても、教を説く者が現れる。すなわちあらゆる時代において、「教」という「コンセプト」そのものは存在しており、そして「教」を説く者がいる、その『教』を説く存在——こそが、「仏」なのである。——と、このような論理が象徴的に語られているのではなからうか。

ここへ来て、釈迦という「歴史的人物」は、教え説く「仏」という、過去・現在・未来に幾度となく現れる普遍的存在に当てはめられる。それは、「仏」という存在が明かされる瞬間でもあり、同時に釈迦の位置づけがなされる瞬間でもあると言えよう。

※※※※※

地中で息を潜めていたとある菩薩は、瞑想の中に在った——彼は遙か昔に起こった出来事を思い起こしていた。いや、それは遙か未来において起る出来事だったのかも知れぬ。もしくは今からそう遠くない過去、もしくは未来に起こったことかもしれない、或いはまた、今この瞬間に起きていることなのかも知れない——。

彼は師の死を看取るため、その背後に座していた。彼は敷物によりかかり、涙を流して泣いていた。「止めよ、悲しむな。嘆くな」と師は言葉をかけた。「何も怖がることはない。恐ろしいことなど、何ひとつないのだから」

菩薩は目を開いた。再び眼前に師の姿が甦る時が来たのだ。

六十のガンジス河の砂の数に等しい幾数万億の菩薩たちは一斉に立ち上がった。そして轟音とともに大地を真つ二つに引き裂き、高く跳躍した。

サンマ・トロイカ・ファンタステイカ *Sanma Toroika Phantastica*

とつぜん、奇妙なぐあいにサンマが恋しくなったので、わたしはサンマを買って来て食べることにした。唯一の問題は、季節が冬だったことだ。

I

その日の朝は目が覚めるなり、いや、目が覚める前から、「サンマを食べたい！」という強い思いが肋骨の中に沈殿していた。理由なんてなかった、ただ食欲だけがあった。

わたしは布団の上で上体を起こした。手足の先は夜明けの冷気にかじられて、しびれている。辺りはほの暗く、有明の月はカーテンの向うで弱々しい光を投げかけていた。それにしても、サンマが食べたくなった冬の朝には、一体どんな顔付きで目覚めればよいものなのだろう。わたしは寝ぼけ眼のまま、いつもに増してひどい有様になっている髪の毛――赤茶けてくしゃくしゃの髪の毛をかき回し、さらにくしゃくしゃにした。

清翔納言には申し訳ないけれど、わたしは冬の早朝だけはどうしても好きになれない。うす暗くて、凍てついていて、奇妙な具合に緊張している冬の朝の空気につつまれていると、自分が生きているのか死んでいるのか、よく分からなくなってしまうのだ。それが言いようもなく気味悪いのだ。

さて、件の「サンマが食べたい」という想いは、どこから湧き上がって来たのだろう。もともとサンマは好きだったのだけれど、そこまでの思い入れはなかったはずなのだ。天高く馬肥ゆる秋、スーパ―の生鮮コーナーなどをふらふらと歩いている時、おすすめ品として所せましと並べられたサンマの勇姿を見ても、「ああ、サンマだ」「サンマが並んでいるなあ」「そんな季節なのだなあ」というような感想をほんの数秒間抱くだけで、そのまま歩き去ってしまう――そんな情の薄いおんなだったはずなのだ、わたしは。それが、季節も変わり、みんなサンマを忘れてしまった頃になって、ようやくとサンマを欲するようになるとは。あまのじやくなのだろうか、わたしは。

わたしは寝ぼけた頭で物思いにふける。あの、日本刀によく似た姿――。塩味のよく聞いた身――。ほろ苦くまろやかなお腹の部分――。さんぜんと輝く脂――。焼いている時に立ちのぼる、香ばしい煙――。わたしは朝から情熱的になっていた。しかし、こんな冬の朝、薄寒い部屋の中でそんな情熱を燃やしたところで、その情熱の焰でもってサンマを焼ける訳でもなく、どうしようもないのだ。

なんだかお腹が空いてきた。とりあえず朝ごはんにしよう――わたしは立ち上がった。

II

夜明け前——。うす暗くうす寒い台所で朝ご飯のしたくをしていると、まるで目が覚めないまま夢の中にとり残されているような気分になって、手にはタマネギを持ったまま、水道の蛇口から滴る水の音にずっと聴き入っていたりするものだ。しかし、一たびそのタマネギを二つに切ってみれば目は覚めて、覚めたその目からは涙が滴り、蛇口からこぼれる水と混ざってゆく。別に取り立てて哀しいこともないし、うれしいこともないのに涙がこぼれるのは滑稽なこと、わたしは目の前にぶら下がっている小さな鏡に映った自分の顔……赤茶けてくしゃくしゃの髪の毛の間に幽霊のように浮かんでいる、泣きはらした目の青白い顔をちらりと見て、肩をすくめてみた。

その時窓の外を、近所でも有名な気狂いおばあさんが通過して行つた。おばあさんは三輪自転車にまたがり、顔に巻きつけたマフラーの端を冬の風になびかせながら疾走してゆく。(わたしはこのおばあさんと出会うまで、三輪自転車がこんなにスピードの出る乗り物であることを知らなかった。)その際におばあさんは手元のベルを絶え間なく鳴らし、「My Way」を甲高い声で歌っている。

そんな風にして街を走り抜けて行くのが、気狂いおばあさんにとって大事な朝の日課で、毎日欠かさず行なっていることだ。ベルの音と「My Way」とがドップラー効果で変質してゆくの

に 耳を傾けていると、「ああ、朝が来たなあ」という気分になるものだ——たとえば、それがどんなにうす暗い冬の朝だったとしても。

いつの日にかわたしも、あんなおばあさんになってしまふのかな——そんなことを考えながら、わたしはイワシ缶に缶切りの刃を突き立てた。(サンマの代用になり、かつ朝食に合いそうな食材は、とりあえずこれだと思つたのだ。)透きとおった油を捨てて、中身をお皿の上にうつし、先ほど刻んだタマネギを乗せて酢をたらす。蛇口からの水、わたしの涙、そして酢と、滴りこぼれ落ちる雫は次々と移り変わってゆく——別にどうでもいいことだけれど。

うん、このスツキリとした味わいは悪くないなあ、とわたしは人さし指についた酢を舐めながら思った。というのも、先日わたしは脂っこい食べもののせいで酷い目にあつたからだ。ちょうど今パンを切っているのだけれど、これが余りに堅くてなかなか切れず、斬り終えるまでにはまだまだ時間がかかりそうなので、その間にその時の話をしようと思う——。

わたしは学生街の中華レストランでバイトをしているのだけれど、その店のメニューに「羊のマルヤキ」がある。まるまる肥った子羊をまるまる一頭、一昼夜かけて丸焼きにしたものだ。(実際には蒸し焼きにしているらしい。)そうした仕込みの関係から、食べるには予約が必要なのと、学生街の食堂のメニューにあるまじき高い値段であることから、滅多に頼む人はいないのだけれど、だいたい半年に一ぺん暗い、もの好きなお客が注文する。

そしてこの前、大学のテニス・サークルがうちの店でコンパを催したのだが、彼らは席を予約するついでにこの「羊のマルヤキ」を注文したのだ。なるほど、飲み会を盛り上げる奇ばつな趣向として、羊のマルヤキにご登場いただくのは素敵な計画に思われる——そ

んな訳で、ドジョウ髭がよく似合う店長のサムラさんは、ヘルニアを抱えた腰をさすりながら、一昼夜かけて羊を蒸し焼きにしたのだった。

そして当日……わたしはワゴンの上に羊を乗せて彼らのテーブルに運んで行く、ものすごい歓声が巻き起こり、座は大いに盛り上がった。ところが、羊が彼らの心を捉えられたのは、その瞬間だけだった。彼らは物珍しそうに羊の表面をつつき回し、無茶苦茶な姿になったあたりですっかり興味を失って、あとはもう見向きもしなかった。まあ、仕方のないことなのだろう。彼らは別に、何かを食べるためにうちの店に来た訳ではないのだ——。二時間後、彼らはお酒のにおいと嬌声を振りまきながら店を出て行き、あとには散乱した酒瓶とコップ、それから、羊でありながら羊でなくなってしまった肉の残りが残った。そして閉店後、無残な姿をさらしている哀れな子羊を前にして、サムラさんはヘルニアの腰をさすりながら言った——「赤茶毛さん、今日のまかないはこれだな」確かに捨てるにはしのびないし、明日あらためてお客に出すわけにもいかなかった。

結局、わたしとサムラさんの二人向き合って、うす暗い電球の下で黙々とその羊を食べた。冷たく固まった脂身が胃にこたえた。わたしは翌日、バイトを休んだ。ベッドに横たわって天井を眺め続けても、お腹の中が気持ち悪くてちっとも眠れなかった。たまにうとうとしかけると羊の幻がまぶたの裏に現れて、また目が覚めてしまうのだった。羊のImageのせいで眠りがさまたげられるなんて、なんておかしい話だろうと思ったものだ。

そんな訳で、もう半分、陸上を四本足で歩くいきものは食べる気がしないのだ——今は、サンマが食べたいのだ。

さて、ようやくパンが切れた。次はそれに、石のように固いバタをぬりつける——またこれも時間がかかりそうだ——わたしはものを食べるのはわりと早い方なのだけれど、食べ物を用意することに関しては少々ろまなのだ。では、バタをぬり終わるまでにまた別のお話をしよう——左手に持っている、この堅いパンを見て思い出した話でも。

それは、かのサルバドル・ダリが作った彫刻の話。頭の上に堅いパンを乗せ、アリにたかられている女の人の胸像なのだが、そのパンが本物のパンだったのだという。そして、その像が出品された展覧会に、とある男が犬を連れてやって来た。犬は空腹だったのか、小麦のにおいをかぎつけたのか、いきなり胸像に飛びかかり、その頭の上に乗ったパンをむしゃむしゃと食べてしまった。——さて、件の犬を連れた男は、かのパブロ・ピカソだったそうだ。それにしてもこのバタ、ほんとうに固い。

さあ、やつのことでしたくが済んだ。わたしはポットのお湯をカップにそそいでインスタント・コーヒーを入れ、イワシとパンの乗った皿をかけてテーブルへと運んだ。そして顔の上にこぼれ落ちてくる髪の毛——赤茶けて、くしゃくしゃ——をどかしながら、タマネギをたつぷりと乗せたイワシをほおばった。うーん、やっぱりサンマとは全然違うな。

やはり、わたしはサンマを食べねばならない——そんなことを思いながら皿を洗っているうち、ようやくと窓の外が明るくなり始めた。それにしても、休日にかぎってこうして早く目が覚めてしまうのは一体なぜなのだろう。中途半端に自由な時間が、わたしの鼻先でふらふらと揺れていて、それはわたしを絶妙な具合に苛立たせる。「平日は憂鬱で、休日は陰鬱だ」というのは、昔の詩人（名前は忘れてしまった）の言葉だけれど、その気持もなんとなく分かる気がする——とは言え、年がら年中うっとうしい顔つきでいるのもナンセンスだと思うのだけれど。だから、わたしは真冬にサンマを食べようと思うのだ。

さて、その問題のサンマだけれど、どこに買いに行けばいいだろう。最寄りの小さなスーパーに行こうか、それとも少し遠いがデパートの地下に行こうか、それとも……四十六番街の魚屋に行こうか。

らくがきだらけのレンガ塀が続く街並みの中にひっそりと在る、あの小さな魚屋。その店を一人で切り盛りしている店主は、深い皺の刻まれた顔を持つ気難しい老人で、魚屋さんというよりは古本屋を営んでいる方が似合う佇まいだ。威勢よく声を張り上げることもないし、値段を豪快にまけてくれることもない。かれの前にずらりと並べられているのはどれも生魚なのに、それらがいつの間にか干物に見えて来そうな気がする。かれはそんな魚たちを濁った目で眺めている。そんな、陰気な魚屋。ぜひともあの店でサンマを買おう——。わたしはそう決めた。理由は、心臓まで焼いてしまいそうな、今朝の肌寒さだ。

それから、折角こんな真冬にサンマを焼くわけだから、一人もそもそ食べてしまうのではなく、ちよつとしたパーティを開きたい。サンマ・パーティだ。しかし、そんなに大人数はいらない。誰を呼ぼうか。

——じゃあ、トンボさんでも呼ぼうかな、とふと思った。

トンボさんはわたしがバイトをしている中華レストランの常連さんで、いつも大きなトンボ眼鏡のサングラスをかけている。もう何年間学生をやっているのか分からない学生さんで、サムラさんはかれの将来を本気で心配している（サムラさんが言うには、かれは相当古くからの常連さんであるらしい）。しかし本人はいたって楽天的で、いつも丸くて真っ黒なレンズの向うでマカフシギな笑みを浮かべているだけだ。

そのトンボさん、この前「珍しく麻雀で大勝した」と言って、わたしにトンボローをおごってくれたのだ。しかもデザートに、ゴマ団子までつけてくれたのだ。あのお礼をまだしていなかったのだ、サンマでお返しをするのもいいかも知れない。

——と、ここまで考えたところで、わたしは重大な問題を思い出した。そう言えば最近トンボさんは店に来て、魚の食べすぎによる水銀中毒の話をしていたのだ。かれが言うには、アメリカのとある舞台俳優が無類の魚好きで、毎日魚を食べ続けたところ水銀中毒にかかってしまったのだと言う。「いやあこわいなあ、おちおち魚も食べれないや」と、本気でおののいていた。そんなかれにサンマをふるまうなど、いやがらせ以外の何ものでもないだろう。という訳で、トンボさんを招待するのはやめにした。

では、誰を呼ぼうか。

——そうだ、ミーコを呼ぼう！わたしは心の中でそうつぶやき、掌を打ち鳴らした。ミーコはしょっちゅうくさっている人間なのだけれど、最近はつとにくさっているらしい。そんなかの女を季節はずれのサンマでもてなしてやるのは、とても素敵な試みだろう。わたしは床の上に転がっていた電話機を取り上げ、ボタンを押した。ミーコはなかなかメールを返さない人間なので、わたしはかの女に連絡を取る時には電話をかけることにしている。

ミーコは占い師を生業にしている。サイズの大きすぎるヴェールとマントを身にまとい、星の動きがどうのこうのの意味不明な理屈をこねながら、ひと様の運勢に難くせをつける、そんな職業。うさんくさいこと、この上ない。しかしミーコは、わたしの大事な友だちだ。わたしは元々、占い師はきらいなのだけれど、ミーコはきらいではない。というのもミーコは本来的には、占いなどどうでもいいと思っている占い師だからだ。

そもそも、ミーコはどうして占い師になったのか……。それは、とある古い歌がきっかけになっている。それは一種の物語歌で、こんな歌詞だ——ある男が一人の女占い師を訪ね、自分の運勢を占ってもらった。女占い師は言った——今日あなたは、運命の人と巡り会うでしょう。それを聞いた男は、期待に胸を膨らませて出て行った。しかし結局、そんな出会いはなかった。男は憤慨して女占い師のところへ戻って来る——このインチキ占い師め！すると女占い師はヴェールを取り、男の前に素顔をさらした——今では男は結婚して幸せに暮らしている。夫婦生活の前途は安泰だ、なぜなら彼の奥さんが将来をばっちり占ってくれているから——。……………という、よく出来た他愛もない歌だ。

ミーコは学生時代にこの歌をラジオで耳にして、ひと「耳」惚れたそうだ。演奏自体はかなり硬派なロック音楽だったらしい。英語が得意だったかの女はノイズまじりで流れて来た歌の歌詞を聴き取り、奇妙な胸さわぎを覚えたのだと言う。三分足らずで曲がフェイドアウトした後も、その胸さわぎは依然として消えることがなかった。「あこがれ」という言葉は、元々は魂が身体から離れてしまう状態（魂離れ）を表しているのだそうだが、魂の離れてしまったミーコは、その歌に出て来た女占い師のようになることを決意したのだ。そしてかの女は実際に、占い師になってしまったのだ。

にんげんの情熱とは面白いものだなあ——わたしはほうじ茶を呑みながら、しみじみと思った。

「実際、占い師になったところがすごいね」かの女にそう言ったことがある。

「なったというより、ならざるを得なかったのよ」ミーコはうるさ気にヴェールを揺らし、そう答えたものだ。

電話がつながった。

「もしもし」ヘヴィー・メタル音楽をバックに、懐かしい、かすれた声が聞こえて来た。

「もしもし、わたし。アカチャケです」

「ああアカチャケ、お久しぶり」がさごそと音がして、ヘヴィー・メタル音楽のポリュー

ムが急に小さくなっていった。「それで、何の用？」

「あのね、サンマを焼くんだけれど、食べに來ない？」

「はあ？」クエスチョン・マークを吐息に置きかえたらば、おそらくこんな音を立てるかどうか。そして、「ゾっとしないわね」という、ものすごく古めかしい言葉をつぶやいた（かの女はレトロな言葉づかいを好む）。「まあいいけど。食べに行く。」

よし。それでは、サンマを買いに行くのでしょうか。

IV

冬になると、わたしの住む街を東西に走っている通りは「一般車両通行止め」になる。道路がすっかり凍結してしまい、車が走るのは危なくて仕方がなくなるからだ。

そのかわり休日には、その凍てついた通りをトロイカが走って行くのが見られる。これは市の交通課が去年からはじめた試みで、すぐに凍結する道路の不便さを逆手に取り、観光効果にもつながるだろうと言うことで、このロシア生まれの乗り物が導入されたそうだ。観光効果に関しては、ちよつと首をかしげたくなってしまうものの（相変わらず、わたしの街の休日はとても静かで、街を行く人もまばらだ）、三頭の馬に曳かれたソリが駆け抜けていく風景はすぐにこの街の風物詩になったし、わたしもそれが大好きだ。

外に出るなり小さな雹の粒が、わたしの鳥の巣みたいな頭に勢いよく降りかかり、そして無茶苦茶にたたき回した。思わず「痛い痛い痛い」と頭を抱えると、粉雪のかけらがするりと口の中にすべりこんで来て、舌の先に貼りついた。こんな日はストーブの横にへばりついて、ロッキング・チェアの上で編み物でもしているべきなのだろう、だけれど、わたしは編み物のやり方を知らないし、ロッキング・チェアも持っていない。いつかは編み物も覚えたいし、ロッキング・チェアもかねがね欲しいと思っている。けれども、今日のところは取りあえず、サンマでも買いに行くより仕方がないのだ。

わたしは雹の攻撃をかわしながら、路傍に停まっているトロイカのもとへ駆け寄った。御者は縁石の上に腰をおろし、缶入りのコーン・スープを飲みながら、少しでも雪の堆積した地面に数式や図形を描きなぐっていた。かれの部下である三頭の馬はまるで銅像かブロンズ像かのように佇んでいて、鼻先からもれている湿った白い息のかたまりだけがわずかにその生命感を伝えていた。

「四十六番街まで！」わたしは御者の後ろに立つと、寒さを吹き飛ばすべく柄にもない元気な声でそう告げた。御者は棒きれを置いて立ち上がり、足元に広がっている幾何学模様をつま先で消しながらふり返った。彼は晩年のビング・クロスビーにそっくりの顔をしていた。「四十六番街ね」

ビング・クロスビーは手づなを引き、三頭の馬は割に弱々しい足どりで走り始めた。自

分が前に進んでいる分、顔にぶつかって来る風が強まっているように感じた。曇空からひらひらと落ちて来た粉雪はわたしの頬や額にはりつき、赤茶けてくしゃくしゃの髪の毛にひっかかった。寒さが手ぶくろやくつ下の中にもぐりこんで来て、手足の先がしびれた。時おり思い出したように雹が降り、わたしは「痛い痛い痛い」と頭を抱えた。街行く人たちはまばらだった。みんな背中を思い切り丸めてポケットに両手を突っ込み、コートの際にアゴを埋めていた。わたしは古いロシア民謡を口ずさもうとしたのだけれど、どうしてもサビが思い出せなかったのでやめておいた。

トロイカは淡々とした速度で進んで行き、最初の大きな交差点に差しかかる。ここを左に曲がって二本目の路地に入れば、わたしが今着ているこの服……ツギハギだらけの、極彩色の服を買った古着屋がある——いや、この言い方は正確ではない。正確に言うと、わたしが今着ている服の材料となった服を買った古着屋があるのだ。

わたしはその古着屋で三枚の服を買ったのだ。古着屋の中は足の踏み場もないほどに大量の洋服が吊り下げられていて、それは丁度首吊り死体のように吊り下がっていて、わたしは息がつまる思いで三枚の服を選んだのだ。しかし苦労して買ってきたにもかかわらず、そのどれもわたしに似合わなかった。わたしは家に戻って、机の引き出しの中を転がっていた裁ちバサミを手に取り、その三枚の服を思うさま切り刻んだ。そうしてできた布の切れ端を、おんぼろミシンで縫い合わせ、新しく一着の服を作り上げたというわけだ。そんな服、どこで売ってるわけ？と皆わたしのことを笑うのだが、そのようなわけで、このツギハギ・ドレスは特製の服なのだ。

この交差点を過ぎたところには、通う人もいなくなり、古びて倒壊しかけた教会が建っている——辛うじて。そしてその前には、たいていパントマイム芸人が一人立って芸をおこなっている——甘んじて。かの女はパントマイム・クイーンと呼ばれている。パントマイム・クイーンは長い髪の毛を無造作に束ねて、真っ黒なレースの服を着て、顔を真っ白に塗り、そして、見えない壁を手でなでたり、見えない椅子に坐ったり、見えないピアノを弾いたりしてすごしているのだった。そんなかの女の芸を見ると、今まで見えなかったものが見えてくるような、あるいは、今までは見えていたものが揺らいで消えてゆくような、そんな気分になるのだった。そしてわたしを含む街の住人たちはそんな気分が好きで、ふと足を止めてかの女を眺めてみたりするのだった。

さらにその傍に、八百屋の屋台が出ている。しなびたカボチャやレタスを山と積み、トウモロコシを山と盛り、今の季節には太陽色に輝く林檎でピラミッドを作っている。奇妙なことに、わたしはその屋台で野菜を買わずに本を買って帰ったことがある。

その時わたしは春菊を買いに行ったのだが、屋台の隅（トウモロコシの脇）に置き去られていたその本にすっかり魅せられてしまい、手に取ってみたり、ぱらぱらと捲ってみたり、その布張りの表紙の手触りを味わっていると、店番の少年が——かれは口周りにヒョロヒョロと無精ひげを生やし、輝きのない大きな瞳をまぶたで半分だけ隠していた——ふ

と顔を上げ、「安くしとくから持っていいよ」と言ってくれたのだった。こうしてわたしは春菊を買うのもすっかり忘れて、その本を買い取って帰ったのだった。

それが四年前の話なのだが、いまだにその本は読んでいて飽きが来ない。というのも、いまだに一つも読めないのだ。なにしろ何語かわからない文字で綴られていて、一体何が書かれているのか、さっぱり分からない。そんなわけで、わたしはこの本を開くたび、その時そのときによって頭の中で勝手な内容をでっち上げて楽しんでいるのだ。その本は読もうとすればちつとも読めないのだが、読もうとさえしなければ、いくらでも好きなように読める本だった。

八百屋の屋台が出ている角を通り過ぎ、ソリはさらに西へ西へと進んで行く。すると、環状線の高架橋が目の前に立ちちはだかる。それをくぐったところに、雑居ビルがひっそりと建っている。そのビルの地下一階で、ミーコは占いをやっているのだ。

ミーコ………気の毒なミーコ。古い歌にうたわれたような、運命の出会いを求めて占い師を始めたものの、かの女がヴェールを取りたくなるような運命の相手はいつまで経っても現れず、やり切れない気持ちのまま生きているミーコ。べつになに一つ損をしている訳でもないのに、ものすごく損をしながら日々を過ごしている気がしてならない——かの女は、そんな風にこぼしていた。呪いみたいなものよ、むしろ、呪いそのものよ——ミーコはそう言って、ウチスキーのビール割りを呑んでいた。そんなつくり話みたいなこと………実際、つくり話だしね………起るはずがないって、分かっているの………頭ではね。それでも、なんだかすごく損をしている気分になるのよね………でも、そんな気分を抱えて生きていたら、結果的には損をしているとも言えるわよね——。わたしは何と答えていいのやら分からずに、トマトジュースとビールを混ぜ合わせていたものだ。

V

ほどなくして、わたしを乗せたトロイカは魚屋の前を通りかかった。「ちよつとここで下して下さい」わたしはビング・クロスビーにそう言い残して、ソリから降りた。

魚屋の店先にはエメラルド色、ブラッド・オレンジ色、ハワイアン・ブルー色、他にもわたしの知らない色をした様々の魚が所せましと並んでおり、じつにサイケデリックな世界を形作っていて、あぶない薬でもきめている時にはきつとこんな風景が見えるのだろうかと思った。そしてその向う——うす暗い店内、裸電球に照らし出されてぼうつと浮かび上がっているモノクロームの影がこの店の店主で、気難しそうな、陰鬱な顔つきで口を真一文字に結び、しわだらけのわし鼻をうごめかしているのだった。ヨーロッパのさびしい公園に行けば、こういう老人がブック・エンドのような体勢でベンチに座っているに違いない、と思った——と言っても、わたしはヨーロッパに行ったことなんてないのだけれど。

「すいません」わたしは心なしかふるえる声でそう呼びかける。

返事はない。わたしは何だか泣きそうな気分になりながら（泣かないけれども）、もう一度呼びかける。

「すいません」

店主は少しも動かない。にごった黄色い目玉も、中空を見つめ続けているばかりだ。わたしは声をふりしぼって言った。

「サンマください！」

それからたつぷり一分間、わたしは待ってみた（それは千年間のことのように感じられた）。静かな空気が重たく垂れこめて、雹が降るほどに凍てついた朝の気温をさらに下げた。それにしても、なぜわたしはこの店に来てしまったのだろうか、それも「心臓まで焼いてしまいそうな、今朝の肌寒さ」などという理由で。

とりあえず今言えることは、この人から時季外れのサンマを買うことは絶対に無理だろうということだ。店主の確信に満ちたような沈黙は、今しがたまでわたしの中に燃え盛っていたサンマへの情熱を一気に冷ましてしまうに足るものだった。世の中にはどうしようもないことが幾つもあった、まさに今わたしが直面しているのもそういう類いのものなのだろう。そもそもが、真冬にサンマを食べること自体が間違っていたのだ。わたしは思った——もう、こんな無益な戦いは止めよう。十分頑張ったじゃないか、わたしは。そして、踵を返した。その瞬間だった。

「サンマ？」

押し潰れたような声で、店主がそう問い返してきた。

わたしは思わず、ゼンマイが切れた茶汲み人形のような動きで振り返った。「はい！サンマです」

「今は冬だよ」

「はい！」わたしは心臓が飛び出すような心持で返事をした。「でも、食べたいんです」

「それで、わざわざ来たんか」店主はにごった目玉でわたしを見すえ、そう言った。

わたしは覚悟を決め、頷いた。

店主はゆっくり立ち上がり、店の奥に消えた。そして数秒後、ガラスの箱を抱えて戻って来た。

「よほどサンマが恋しくなったのだな」店主はそう呟きながら、箱の蓋を取った——わたしは思わず息を呑んだ。中には、氷漬けになったサンマがぎっしりと詰まっていた。その姿は、昔テレビか何かで見た、シベリアの永久凍土に埋まっていたマンモスの姿を思い起こさせた。サンマたちは背筋をぴんと伸ばし、身を寄せ合って沈黙していた。まるでそれは、サンマではない何ものであるように思われた。

「何尾だ？」

「二匹です！」わたしは、そのガラスの箱の美しさに目をうばわれながらそう答えた。

「持って帰ってこのまま置いておけば、夕方ごろには氷もとけて食べごろになるだろ」そう言って店主は箱の中から氷漬けのサンマを二尾取り出し、油紙につつんだ。わたしは弾

かれたようにお辞儀をし、「ありがとうございます！」と叫んだ。

お金を払うと、店主はまたぞろ気難しそうな、陰鬱な顔つきに戻り、口を真一文字に結んでだまりこんでしまった。しかし、さつきまでわたしをたじろがせていたその沈黙の重さが、今ではなぜだか奇妙になつかしいものに思われた。その時わたしは、サンマが入っていたガラスの箱が実はガラスではなく、氷で出来ていることに気がついた。

これでわたしの冒険は終わり——ビング・クロスビーはまたぞろ手づなを引き、三頭の馬は割に弱々しい足どりで再び走り始めた。自分が前に進んでいる分、顔にぶつかって来る風が強まっているように感じた。曇空からひらひらと落ちて来た粉雪はわたしの頬や額にはりつき、赤茶けてくしゃくしゃの髪の毛にひっかかった。寒さが手ぶくろやくつつ下の中にもぐりこんで来て、手足の先がしびれた。時おり思い出したように雹が降り、わたしは「痛い痛い痛い」と頭を抱えた。街行く人たちはまばらだった。みんな背中を思い切り丸めてポケットに両手を突っ込み、コートの際にアゴを埋めていた。わたしは古いロシア民謡を口ずさもうとしたのだけれど、やっぱりサビが思い出せなかったのでやめておいた。

と、その時とつぜんに、目の前に何かが飛び出して来た。トロイカは急停車し、つんめったわたしは危うくソリから放り出されそうになった。茫然としているわたしの耳に、調子っぱずれの「My Way」が響いて来た。

三頭の馬の前に、何かが立ちほだかっていた。その人影は、顔にぐるぐるとマフラーを巻きつけ、三輪自転車に乗っていた。わたしはその姿をよく見知っていた——それは、毎朝のように通りを駆け抜けて行く、あの気狂いおばあさんその人だった。おばあさんは自転車から降りると、飛び跳ねるような足取りでわたしの方に向かって走って来た、もちろん「My Way」を歌いながら。そして言葉も出ずにいるわたしに向かって、こう言った。

「HA! あんたモリキさんの店でサンマ買いなすったでしょう」

わたしは非常に面食らいながら頷いた(ちなみに、あの魚屋の店主が「モリキさん」という名前であることは初耳だった。そもそも名前があったことに驚いた)。

「やっぱり。おいで分かるのよ、YA!」おばあさんは満足げに言った。「サンマにはダイコンオロシよダイコンオロシ。GA! あんた家の冷蔵庫にダイコンあるの?」

「さあ——」

「ないんなら買って帰りなさいよ。DA! そいじゃあたしは宇宙船を買いに行くから! PA! PE! PU! PI! PO!」

そう言い残しておばあさんは三輪自転車にまたがり、颯爽と去って行った。いつものようにかの女の「My Way」は、ドップラー効果で変調していった。

宇宙船を売っている店がこの街にあるのかどうかは、わたしは知らない。ただ、サンマにはダイコンオロシがつきもの、というのは尤もな話だ。そこでわたしはトロイカにもう一度停まってもらい、八百屋の屋台に寄ってダイコンを買った。あの気狂いおばあさんと魚屋や八百屋とがぐるのかどうかは、わたしは知らない。

VI

帰宅後、わたしはごはんを炊き、「みそスープ」を作った。どうでもいいことだが、みそ汁のことをわざわざ「みそスープ」と呼んでみたのは……。この前、わたしは商店街のくじ引きでおなべを当てただけけど、このおなべがとてもメルヘンチックだったのだ。側面にはポピーの花とアナグマの絵が描かれていて、蓋には流麗な書体で「*Bonjour, POM-PON!!*」と書かれている。じつにメルヘンだ。そんなメルヘンチックなおなべでみそ汁を作っていると心の底からばかしくなってきた、ただのみそ汁を「みそスープ」なんて呼んでみたくなるのだ。

Bonjour, POM-PON!! とつぶやきながら、わたしはおなべに水を張り、カツオブシとコンブを思うさま投入する。うなるほど出汁をとってやろう。具材はワカメだ。わたしは煮込み過ぎてワカメがくたくたになってしまった「みそスープ」が大好きだ。 *Bonjour, POM-PON!!*

さて、あとはミークが来てからサンマを焼き、ダイコンをすりおろすだけだ。なんだか急につかれが押し寄せてきた。それはそうだろう、時季外れのサンマを買いに行くなどという冒険を、朝っぱらから繰り広げたのだから。わたしは先日UFOキャッチャーにて手に入れたメガネザルの人形を枕にして、至福のひと時である昼寝をはじめた。

さて、その時に見た夢について……。表は雪やら雹やらが降りしきっているけれど、夢の中に広がる空はたちの悪い冗談のように晴れ渡っていた。わたしは路面電車に乗った。路面電車は使い古したアルミのおべんとう箱みたいな形をしていて、その車体はラクガキだらけだった。いっしょに乗り合わせたのは、背中に矢が突き刺さっているカモと、巨きなリュックサックを背負った風ぐるま職人だった。

電車は都市部を通り抜け、郊外を走り、だんだんと田舎へ近づいて行った。背中に矢が刺さっているカモはわたしの隣に座り、食べものをねだった。わたしはカモにせがまれるまま、ポケットに入っていたチョコレット・キャンディを食べさせてやった。カモの食欲は旺盛だった。あんまりうるさくせがむので、わたしはチョコレットを包んでいた銀紙の方をその口の中に放りこんでやったのだが、するとカモは怒って「グワア」と鳴いたのだった。

風ぐるま売りの痩せこけた体は、不格好に膨らんだリュックサックにおしつぶされかけていた。リュックサックからは風ぐるまがはみ出っていて、開け放たれた車窓から吹きこんで来る風によってカラカラと回転していた。それはまるで風ぐるまが、風ぐるま売りの生気をすいとして回っているようにも見えた。

気づいたら、路面電車はあぜ道を走っていた。窓の外は田園風景だった。この電車の終点は、寒村の真ん中であつたのだった。

電車が停まると、村中の子どもたちが駆け寄って来た。子どもたちはめいめい手にペン

キの缶を持っていて、路面電車の車体に落書きし始めた。たちまち、新しいラクガキが電車を彩るようになった。

風ぐるま売りは下車して、子どもたちに風ぐるまを配ってまわっていた。風ぐるまをもらうと、子どもたちは踵を返して帰って行った。わたしは窓から首を伸ばし、その子どもたちの中に幼い頃の自分がいないか探すのだった。わたしは思わず手を伸ばし、「待って！」と叫んだのだが、伸ばした手はどこにも届かず、声にならない声が空気の中に拡散してゆくだけだった。あとには、超然とした顔つきで座っているカモが一匹いるだけ――。

カモは背中矢を突き立てたまま、その矢などまるで存在していないかのような、或いは、その矢は自分の体の一部にしか過ぎないのだとも言いたげな、そんな様子で座っていた。やがてカモの輪郭は崩れ始め、気づいたらそれはわたしの頬の下でつぶれているメガネザルの人形に変わっていた。そして、ゆらぎながら浮かび上がって来た風景は見慣れたわたしの部屋と、テーブルの上に横たわっている二尾のサンマだった。そんな平凡な風景を見渡してみると、なんだか夢を見ているみたいだと思った。わたしは上体を起こして、赤茶けてくしゃくしゃの髪の毛をかき回した。

サンマは、そろそろ食べごろにまで戻ったようだった。

VII

夕方、ミーコがやって来た。かの女はロングTシャツ一枚にジーンズという、とても寒そうな服装だった。わたしはびっくりして「ミーコ、寒くないの？」と尋ねた。

「寒いけどさあ、もう私、平日はすごいゴテゴテしたドレスとか着て、その上にヴェールまでかぶってるわけじゃない――まあビジネス用の衣装だから、しかたがないけどさ。だからさ、休日くらいはこういう軽々とした格好でいたいってわけよ。それよりあんだこそ！」とミーコはわたしの頭を指差してこう言った。「いつにも増してすごいことになってるわよ、その髪の毛！」

「寝起きだからだよ」わたしは鳥の巣をかき回しながら言った。

「それで、これが例のサンマってわけね」ミーコは、テーブルの上に寝そべっていた二尾のサンマを見て言った。わたしが寝ている間に、いい具合に自然解凍されたようだった。

「それにしても、なんでまたこんな季節にサンマなわけ？」

「さあ」あらためて問われても、わたしも困る。「とっぜん食べたくなったから」

「やっぱりあんだ、ヘンな人ねえ」ミーコはあきれたように笑った。

「もう焼こうか？」とわたし。

「まだ夕飯時には早くない？」とミーコ。

「じゃあ、取りあえずお茶でも飲みますか」

そう、わたしは「お茶でも飲みますか」と言っただけなのだが、ミーコはポケットからウチスキーの小瓶を取り出して、さっさと飲み始めてしまった。お酒を飲み始めるにはま

だ早い時間だのに……しかし、かの女が飲んでいるならわたしも飲まない訳にくまい——わたしはそう思つて、レッド・アイの調査を始めた。

ミーコの髪の毛は黒色のストレート・ロングで、枝毛なんて一本たりとも無さそうなほど見事で、要するにわたしの髪の毛の対極にあるようなものだ。正直なところ、じつにうらやましく思われる。しかし、かの女はその見事な黒髪ストレート・ロングを大きなヴェールですっぽり覆つてしまふわけで、とてももったいないことだと思う。

とは言え、ミーコも丸くなったのだ。今日などこうしてヴェールをとつて、その見事な黒髪ストレート・ロングをなびかせてやつて来たのだから。以前のかの女はもつと頑なだった。それこそ、仕事の時もオフの時もいつだってヴェールを着用していて、取るのは洗髪の時と散髪の時だけという徹底ぶりだった。そうやって、かの女は来るべき運命の瞬間にそなえていたのだ。

「何？私の髪にゴミでもついてる？」とミーコ。

「いや、別に」わたしは肩をすくめ、ビールとトマト・ジュースを混ぜ続けた。

「それにしてもあんた、ほんとレッド・アイ好きよね」ミーコがあきれたように言う。

「こうすればさ、トマト・ジュースは生ぐさくならないし、ビールは苦くなくなるし」わたしは渾身の力でレモンをしばらくながら言った。「それよりあんたのウキスキー好きもすこいよね」

「好きで飲んでるんじゃないのよ、これは習慣にすぎないのよ」

それは、なおのことたちが悪い——わたしはかの女の肝臓の具合を心から心配した。「お医者さんにとめられてたんじゃないの？」

「医者とはめてる。けれど、私はとめてない。それだけのはなしよ」と、ミーコは訳の分からないことを言った。

そう言えば半年前、かの女がぼろぼろ泣きながら電話をかけてきたことがあつて、別に泣きながら電話をかけてくるのはいいのだけれど、それが深夜三時十五分ごろで、なかなか大変だったのだ。その時かの女は涙をすすりながら「私、もう絶対にお酒はやめる。禁酒教会に入る」なんて言っていたのだけれど、あれはやはり酔っ払った勢いで発言だったのだろう。

そして今のミーコは「私も、おとなになったのよ」なんて言いながらウキスキーを叩っているのだが、そういうセリフや仕草じたいが子どもっぽくて堪らないのだ。しかし、六十年代風のメーキャップで縁どられたかの女の顔には、もの悲しき小じわが刻み込まれてもいるのだ。かの女を悩ませているのは「青さ」なのか、それとも「老い」なのか、一体どちらなのだろう。「ちよっとビールちょうだい」そう言つてかの女はわたしの手からビールの缶を取つて、ウキスキーのビール割りを作つた。

「最近どう？」とわたしは尋ねた。

「えらく漠然とした質問するよね」とミーコ。「何も変わらないし、驚くようなことなんか何ひとつ起こらないし」

「ふうん」わたしは再びトマトジュースとビールを混ぜ始めた。

「何。自分から話を振っておいて、ずいぶん素っ気ない返事じゃない」そしてミーコはウヰスキーのビール割を流しこんだ。「ま、いいけどさあ」

しばらく、わたしたち二人の間を沈黙の空気が流れた。ほどなくして、ミーコが伸びをしながらつぶやいた。「時々ねえ、たまらなくなるのよね」

わたしはミーコの方を向いた。ミーコはうんざりしたような顔つきで語った。

「毎日毎日さ、冗談みたいなヴェール被って、薄暗い部屋の真ん中に坐ってさ。へんなにおいのお香焚きしめて——。インチキなインド風の絵画を刺繍した布を張り巡らして——。それで、もっともらしい顔をして、「北向きの部屋に引っ越しなさい。さもなくば、よからぬことが起こります」だとか、「あなたの肩の上には、前世であなたが恨みを買った人の霊が乗っています」だとか、大真面目に言い続けて——。そんなことばかり毎日毎日やっている、疲れた時にふと、『なんだか知らないけど、今の私はすごく間抜けだ』って思えてくるのね。」そしてかの女は、お酒のにおいのするため息を吐いた。「そんなこと何年やってたって、誰も迎えに来てくれないのにねえ」

それきり、ミーコは黙りこんだ。わたしはトマトジュースとビールを混ぜていた。テーブルの上には、時季外れのサンマが二尾横たわっていた。冬は寒いものだ、とわたしはつれづれなるままに思った。

「あんたはどうなの、最近？」とミーコ。

「別に。同じようなものよ。」とわたし。

「そりゃ、お気の毒さま」

「どういたしました」わたしはお辞儀をひとつした。そして、ふと思いついて「ねえ、お気の毒ついでに、ちよつとわたしの運勢でも占つてよ」

「何よ、突然ね」ミーコはむっとした顔つきで言った。「私はビジネスでやってるのよ、ビジネス。遊びじゃないのよ」

「報酬のかわりに、サンマを食べさせてあげるじゃないの」とわたし。

「はいはい。あなたの運勢ね——ま、ロクなことがないでしょう。ラッキーカーラーは、シヨッキングピンク。その赤茶色の髪の毛をシヨッキングピンク色に染め上げたら、少しは幸せになれるかもね」

「むちゃを言うね」とわたし。

「まあいいじゃない。——どうせでたらめなんだし」とミーコは言って、ごろんと床に寝そべった。「だいたい、髪をピンク色に染めたくらいで幸せになれるんなら、世界中の人たちが美容院に殺到するわよ。地球がシヨッキングピンクに染め上げられるのよ。そんなことになったら、もう人類も滅亡ね」

なんとなく殺伐とした空気が部屋に漂い始め、ミーコはウキスキーのビール割りよりも、むしろその空気に酔いつつあるように思われた。そこでわたしは話を変え、当たり前障りのない、本や映画の話をすることにした。

ミーコは、最近DVDを借りて観た『ワンフォはいかにして助けられたのか』という映画が面白かったと言った。面白い題名だね、と言うと、「ワンフォ」というのは主人公の名前なのだ、と教えてくれた。

ワンフォは絵師だった。それも、素晴らしい絵師だったそうだ。彼は忠実な弟子を一人連れて、絵を描きながら旅をしていた。

ところがワンフォは、とある国に入ったところで捕えられてしまった。その国の国王はまだ若者だったのだけれど、まるでおじいさんみたいな顔をしていたという。ワンフォは国王に「なぜ私を捕えるのですか。私はしがない絵描きです。何も悪いことなどしておりません」と尋ねた。すると、国王は話を始めた。

——分らないか、ワンフォよ。それでは、私の生い立ちから話さねばなるまい。

——昔、私の父は、お前の描いた絵を集めていた。父は、絵とは世俗を映す鏡のようなものだと考えていた。幼い頃の私は、お前の絵がたくさん飾られている部屋をあてがわれた。私は過保護に育てられ、その部屋から外に出してもらえなかった。私は、お前の絵に囲まれて育ったのだ。日夜お前の絵を眺め、もの思いに耽り、いつか自分が目にするであろう外の世界に思いを馳せていた。

——やがて私は成人し、部屋の外に出る事を許された——。私は期待に胸を膨らませ、外の風景を見るために、城の屋上に上った。——だが、そこに広がっていた景色は、お前が描いた絵ほどは美しくなかったのだ。

——それから、万事その調子だった。城を守る兵士たちは絵に描かれていたようには勇敢でもなく、宮廷の女たちは絵に描かれていたほどは艶やかでなかった。空の色や海の色も、私が思っていた色とは全然違うものだった。部屋を出てからというもの、私が味わったのは失望の連続だった。ワンフォよ、おまえは私の人生を無茶苦茶にしたのだ。それが、お前の罪だ——。

「それで、ワンフォはどうなるの？」とわたしは尋ねた。

「さあ。それは観てからのお楽しみ。今度DVDを貸すよ」

そしてミーコはウキスキーのビール割りを飲み干し、一息を吐いて言った。

「なんか、お腹すいたね」

わたしは立ち上がった。

「じゃあ、サンマ焼いてくるよ」

X

ちょうどサンマが焼き上がるころ、ミーコが台所にやって来た。

「ダイコンはわたしがおろすよ」

「大丈夫？ずいぶん出来上がってるみたいだけれど」

「まかせな」かの女は自信たっぷりに胸を張った。

まあ、せっかくの好意を無駄にするのも何だし、とわたしは思い、ミーコにダイコンとおろしがねを渡した。

うす暗くうす寒い台所の中、みそスープのにおいと、ダイコンをすりおろす音とが混ざり合って、ぐるぐると回転していた。

「ところでさ、私結婚するかもしれない」

ダイコンをおろしながらミーコが言った。

「へえ、おめでどう」わたしはみそスープをかき回しながら言った。

「いや、まだ全然決まってもないんだけどね」とミーコ。「母さんから電話があつてね、『いい話』とやらがあるんだってさ」

「ふうん」わたしはみそスープをかき回し続けていた。

「インチキ占い師を嫁にもらうだなんてね」と、かの女は笑う。「奇特な人もいるもんだね」

「じゃあ、もう実家帰るんだ」

「いや、だから受けたらの話だけどね」とミーコ。「——まあ受けたとしたら、もう占い師はやめて、帰ることになるだろうね。どのみち、この仕事を続ける意味もなくなるしさ——もちろん今の段階では、どうなるか分からないんだけどね」

「なるほどね」

「何がなるほどなんだか」ミーコは苦笑いして、肩をすくめる。「で、どう思うよ？」

「どう思うって、何がよ？」

「だからさ、この、わたしの今後の方向性についてさ」

「分からないよ」とわたし。「でもまあ、いいんじゃないの？」わたしは火をとめて、おなべをコンロの上から鍋敷きの上にうつした。「どうってことないよ、たぶん」

「そうだよねえ」ミーコは笑った。

「それよりミーコ、あんたどれだけダイコンおろすつもりよ？」わたしはミーコの手元にチョモランマのごとくうす高くつもった、ダイコンおろしの山を指差して言った。

X

茶わんに盛りつけられた柔らかなごはん。それから、湯気立つ温かいみそスープ。そして、本日のメインディッシュ——秋が終わったことに気づかずじまだった、二匹のサンマ。まるでそれは、サンマではない何ものであるように思われた。

「いただきます」とミーコ。

「Bonjour, POM-PON!」とわたし。

何それ、とミーコはいぶかしそうな顔つきで尋ねてきた。わたしがおなべの蓋を指差すと、かの女はあきれ顔で笑った。

象使いの挽歌

とある象使いの話をしましょう！

彼はそれはそれは醜くて、臆病で、いつもやり切れない気分を抱えて生きていました。友だちと言え、かなしい目をした小さな象一頭だけ。

彼の手も象の足も、深く刻まれた皺でおおわれていました。

けれども象使いはサーカスの人気者でした。

象を使うことにかけては、彼は天才だったのです。

ピューー！という口笛一つで象は踊り、玉の上に乗り、火の輪すらくぐり抜けました。つめかけたお客たちは熱狂し、万雷の拍手を送りました。

象使いは、美しい曲馬師の娘に恋をしていました。

白塗りの化粧と真つ黒なマスカラがよく似合い、胡蝶のように舞う少女でした。

象使いは稼いだお金を、そっくり娘に与えていました。

お金を渡した日だけ、少女は微笑んでくれるのでした。

それが空しいことだとは、象使いにもわかっていました。

それでも、少女が笑いかけてくれるならば、空しくてもいいと思っていました。

どうせそれしか得られないのならば、お金で買ったほほえみでもいい。

象使いは死に物狂いで働いて、少女に貢ぎ続けました。

しかしある日彼は知ってしまったのです、少女が巨漢の刺青男を愛していることを。

そして少女が、彼からもらった金を、刺青男にせつせと貢いでいたことも。

なあに、よくある話じゃないか。

薄々、勘づいていたことじゃないか。

あの娘が笑いかけてくれるなら、空しくてもよかったじゃあないか――

そう思っていたはずでした。

しかし彼の心臓は、つぶれてしまったのです。

象使いは象に跨り、口笛をピューー！と吹きました。

たちまち象は軽やかにステップを踏みはじめ、テントの隅にいた刺青男に歩み寄りました。

刺青男は命乞いをする間もなく、パチン！と踏みつぶされました。

たった一瞬の出来事。二メートルもある刺青男は、無残にもつぶされてしまいました。

テントの中は騒然となりました。

サーカス団長が激怒します「おい、貴様、どういふつもりだ！」

口笛が鳴り響き、団長も**ドシン！**と踏みつぶされました。

団員たちは逃げ惑います。意地悪なピエロも、嫉妬深い空気女も、高慢きな空中ブランコ乗りも、みんな顔色を真っ青に染めて、断末魔の悲鳴をあげるばかりです。

そして象使いは、象の上で口笛を吹くばかりです。それを合図に、象はステップを踏み続けました。

とうとう曲馬師の少女ひとりが残されました。

一瞬だけ、象使いの心にまよいが起りました。

少女は泣きながら叫びました。「わたしがほんとうに愛していたのは、あなたなの！」それを聞いて、象使いの心は決まりました。

「うそつきは嫌いだ」

テントの中に、口笛の音が響き渡りました。

サーカスの一座は、とうとう象使いと象だけになってしまいました。

象使いは象に跨って、旅回り続けました。

でも、もうテントの中で芸を見せるのはやめました。

かわりに、行く先々の村を踏みつぶして回ることにしたのです。

ピュー！彼は口笛を吹きます。

ダダン！象は足を踏み下ろします。

がれきの山と化してゆく家々、ペしゃんこになった死骸が辺り一面に横たわっています。

泣き叫ぶ声も、許しを乞う声も、象使いの耳を素通りしていきます

彼は、ただ**ピュー！**と口笛を吹くだけなのです。

「こいつは面白いや！」彼は、象の上で笑い転げておりました。

「何もかも、めちゃくちゃにしてしまえ！」

しかし、そんな喜びも長くは続きませんでした。

象使いは、相も変わらず、ちっとも心が満たされていないことに思い当たったのです。

おかしいな、やっぱり全然楽しくないぞ。

おれは結局、何がほしかったんだろう。

辺り一面に広がる、荒れ果てた景色を眺めて、象使いは途方にくれまし。

おれは結局、何がほしかったんだろう。

象使いはもんどりうって、象の上から飛び降りました。

地面に横たわる御主人さまを、象は困惑顔で見つめています。

差しのべられた長い鼻を払いのけると、象使いは深呼吸しました。

ピューー！

象は戸惑いました。けれども、口笛は絶対だったのです。
主人に教えられた通り、足を振り上げました。

これでよかったんだろう。

皺だらけの巨大な足の下で、象使いは呟きました。

やっと、気が楽になったよ。

象使いは目を閉じました。

The END-.

物語はこれで終わり。

そして、荒れ果てた世界の中で、一頭の象だけが取り残されました。

The END-.

物語はこれで終わり

終わってしまうのですが、

わたしは象のことが気がかりでならないのです。

主人を失った象は、どこに行くのでしょうか。

象使いは目を閉じたまま開きません。

象のかなしい目は開かれたまま。

口笛の聞こえない、静かな世界の真ん中、

彼が踏み荒らしたがれきの山の中を通って、

象はとぼとぼと去って行ったのです。

3 文小説集

3 文小説

- ① ある夜、3つの文章で完結する簡潔な小説を書くことにした。
- ② さっそく執筆に取りかかるなり、アルセーヌ・ルパンの知り合いを名乗る男がやって来て、ぼくの帽子を盗んで行った。
- ③ その一週間後、夜空をホーキ星みたく飛んで行くぼくの帽子が見えたという。

幸運嬢

- ① 幸運嬢はお化粧の最中で、背中に白粉をまぶしていた。
- ② かの女はプロペラヒコキを手放したお金でこみこみした家を買ひ、香水タバコを煮込んだスープを作り暮らしていた。
- ③ 幸運嬢は、ほんとうは幸運ではなかった。

一期一会

- ① A 「ヤア！ごきげんよう！」
- ② B 「ヤア！ごきげんよう！」
- ③ AとB 「それでは、ごきげんよう！」

とある私生児のはなし

- ① ある日となり町まで出かけたヤギが、忽然たまごを産み捨てたのだと言う。
- ② そしてこの話はもうオシマイ！
- ③ なにしろ私は、じぶんの出生のことを余り語りたくないのだから。

板チョコ

- ① タバコケースが落ちていた。
- ② 一瞬、トランプのババのようにも見えた。
- ③ 拾って見たら、板チョコだった。

踊り子

- ①とある踊り子の女の子、茶碗の中に隠れて恋人の帰りを待っていた。
- ②しかし存外に茶碗の中は入り組んでいて、とうとうかの女は迷子になってしまった。
- ③気づいたらアラスカの山の上、金鉱さがしの人々の列に並んで歩いていた。

けだるさ

- ①キッチンの床に坐り込んで、名前のない女がコップを眺めていた。
- ②コップの中を回転木馬の隊列が行進して行った。
- ③女はまばたきもせず、それを眺めていたのだった。

3文クッキングタ

- ①玉虫色の足つき魚を三枚におろし、ニッキの香りがする葡萄酒に漬け込んで、300000000年間寝かしてください！
- ②それから付け合わせに、庭の木に実った *Lemonade* の実をすりつぶしてダンゴを作りましょう！
- ③大きくて柔らかいお皿に盛りつけて、いちばん上にバナナの葉っぱを乗せたら出来上がりです！

パンの種

- ①街はずれの無人パン屋に行き、パンの種を買ってきた。
- ②きみどり色の庭にその種を撒くと、たちまちパンの木が生えて来た。
- ③さすがは無人パン屋の *Self-Survive!* とぼくは賞賛しながらパンの実を収穫して回った。

スコンプ

- ①スコンプとひきかえに、ぼくは100000000ペンスのプラネタリウムを狐男爵に売ってしまった。
- ②100000000ペンスのプラネタリウムは、悲しげな、うらめしげな顔でカラカラ笑っていた。
- ③ぼくはスコンプをかじりながら、胸さわぎを抑えて帰り道を急いだ。

しくみ

- ① 信じてもらえるものか！
- ② 地球の動力がゼンマイだったなんて。
- ③ ねじを巻いていたのはオットセイだったなんて。

またしても泥棒に遭う

- ① ぐにゃぐにゃしたヨウカンが、ぼくのサイフを盗んで逃げだした。
- ② その逃げ足たるやミュンヘン・オリンピック出場選手なみに早かったが、駆けつけたポリスマンやポストマンがみごとに取り押さえてくれた。
- ③ つかまえてみると、そいつはヨーカンではなくて、あなたの弟だった。

英語で歌うドイツ人たち

- ① 「mayonnaise」という言葉で終わる本をポケットに入れた。
- ② 水筒には緑プトウ酒を、バスケットには鴨サンドウィッチを詰め込んだ。
- ③ さあ、凍った河へピクニック！

世界の歴史

- ① 中華鍋の底でキャベツをいためながら言った、「結婚しよう」と。
- ② ちょうどその時、ナポレオンはロシアで旗を燃やしていた。
- ③ カエサルはと言うと、穀物を値切っていた。

帰って来た狐男爵

- ① 今朝、街で狐男爵を見かけた。
- ② うずら卵一個買うのに、エンエンと値切る交渉をしている始末。
- ③ プラネタリウム道楽なんぞやってるからだ！

身を裂かれる想い

- ① 川と海の境目で、ウナギが錯乱していた。
- ② 「わがフルサトは、どっちだったかしら？」
- ③ その長い身体の端と端を、それぞれべつ異なる塩分濃度の水に浸しながら。

大人

- ① 「いいセロハンが入ったんですよ」と店主。
- ② 「ハタチを過ぎるたのなら、こういうものの良さが分かるようにならないと」
- ③ そう言って、ビール瓶いっぱい詰めたセロハンを売りつけてくる。

家族旅行

- ① イサドへ行くのかい？
- ② つめたい川の底をたどってー。
- ③ クラムボンは死んじゃったというのに。

運命論

- ① フランスパンとフライパンが恋をした。
- ② 幸福な誤解にもとづいて。
- ③ 最終的には不幸になった。

玩具

- ① あのカチャガチャした晴れ空の部品は何？
- ② 油を差せば星が出るの？
- ③ そんなら、もう話をしない！

狐男爵の息子

- ① 狐男爵に息子が生まれたらしい。
- ② ホームパーティーに招待されたので行ってみると、子どもは養殖五光星の小さなカケラで遊んでいた。
- ③ この親にして、この子ありかと呆れていると、奥さんがシャンパンを注いでくれた。

狐男爵のホームパーティーにて、
1000000ペンスのプラネタリウムと再会する

- ① 1000000万ペンスのプラネタリウム「久しぶりね」
- ② ぼく「久しぶりだね」

③1000000万ペンスのプラネタリウムとぼく「それでは、こきげんよう！」

クリスマス・ソング

- ①人知れず牝牛のメリーがニワトリのたまごを産んだ。
- ②人知れず牛小屋の中でニワトリのたまごを産んだ。
- ③そのたまごでオムレツを作ったら、ミルクの味がした。

ココア味

- ①ココアシガレットに火をつけると、ボン！と爆発した。
- ②その力を応用して、新型エンジンが発明された。
- ③開発者の頭はチリチリのアフロで、ほんのりココア味。

ハンペン

- ①ある夜、ねむれないので外を散歩していると、ハンペンに出くわした。
- ②こんばんは、と言ってハンペンは帽子を脱いだ。
- ③存外に礼儀正しかったので、ぼくは少々びっくりした。

パニック

- ①パン！
- ②シャンペンのお腹が破裂した！
- ③街は上へ下への大騒ぎです。

サイレント

- ①モノクロームのりんごが落ちていた。
- ②拾って帰ってアップルパイを作った。
- ③サイレント映画みたいに静かなお茶の時間。

A氏

- ①A氏は天文学者です。
- ②そしてサラリーマンでもあります。

③彼は、昔なつかしい蒸気機関が動力源です。

正体

①ある夜、明治通りを歩いていると、妙に糸を引く歩き方の男とすれ違った。

②もう一度その男を見ようと振り返ったら、もう消えていた。

③あとからよく考えてみると、彼はナットーだったのだろう。

宣伝

①ベルボーイが一心不乱にピラを撒いていた。

②ピラには、彼の半生記が流麗なキリル文字で印刷されていた。

③人々はそれを受け取るやってくるくと巻き取り、帽子の中にしまった。

とある屋下がり

①お茶を飲むかい？

②イヤ、飲まないね！

③そう言って、ピョートル大帝は立ち去った。

紐育

①帽子をかぶろうとしたら、その中にスッポリ入ってしまった。

②なんとか抜け出すと、そこはニューヨークだった。

③というてんまつをポリスマンに話したのだが、てんで信じてもらえない。

職工

①ある日、セントラルパークのどこかでサンドイッチを分解している男がいた。

②しかし思うように作業がはかどらず、とうとう彼はカンシヤクを起こしてサンドを投げ出してしまった。

③ネジ回しも使おうとしなかったんだもの、と人々は噂し合った。

ランチタイム

①お腹がすいたので、カレー屋に入った。

- ② 席に着くと、東風に乗ってフォークがビュン！と飛んで来た。
- ③ さすが金沢カレー、と僕は感心した。

Mountain Side

- ① ある日、山合いの村をドライブしていると、突然に海水浴場に行きあたった。
- ② そこには大きなリゾートホテルもあれば、ヤシの木や海の家まであった。
- ③ ところが肝心の海はなくて、ヤッパリ山があるだけだった。

抒情小曲

- ① 僕はその頃、毎日のように金沢カレーを食べていた。
- ② ある日、ビュン！と飛んで来たフォークがポン！と爆発した途端、僕は金沢に空間移動していた。
- ③ 金沢の街を俯瞰しながら、僕は「ふるさとは遠きにありて思ふもの」という詩句をしみじみと思い出していた。

Power to the people

- ① パンがなかったのでケーキを食べようと思った。
- ② その時、ギロチンの刃がタン！と落ちた。
- ③ 革命だ！と人々は叫んだ。

シュルツ・ド・レミング氏

- ① シュルツ・ド・レミング氏のコーヒー・カップがカタカタと揺れ始めた。
- ② すると氏は舌をカメレオンのごとく伸ばして、アッと言う間にカップを捕食してしまった。
- ③ さすがはシュルツ・ド・レミング氏、と僕は感嘆した。

シュルツ・ド・レミング氏ふたたび

- ① シュルツ・ド・レミング氏は、ウクレレの中でハムスターを飼っている。
- ② そして氏ご本人は、クラシック・ギターの中でお昼寝をしている。
- ③ さすがはシュルツ・ド・レミング氏、と僕はますます感嘆した。

シュルツ・ド・レミング氏よ永遠に

- ① シュルツ・ド・レミング氏は自分を缶に詰め、米国に船便で送った。
- ② しかし船の中で発酵し、爆発してしまった。
- ③ さらにシュルツ・ド・レミング氏！と、僕は一粒の涙を葡萄酒の中に溶かした。

短歌

- ① どうやら私は、かりようびんがの私生児だったらしい。
- ② まあ、どうってことないですがね。
- ③ ——— そう言って、タニシは砂を吐いて笑った。

石

- ① ロゼッタ・ストーンに寄りかかって、静かに眠っている。
- ② 夢の中に、ヒエログリフが流れて行く。
- ③ 意識は時間を超える。

樺太にて

- ① 岩野泡鳴は焼きそばを注文した。
- ② 彼はそれに酢をかけて食べ始めた。
- ③ おかしなことをするもんだな、と私は思った。

第三惑星大運動会

- ① 位置について、よい・・・・・・・・
- ② ドン！
- ③ 地球が突然走りだす。

水く水く

- ① ギタリストは、ポンポン菓子を売っていた。
- ② そうやってかれは、三千年間暮らしている。
- ③ ランプの中にサラダ油をそそいで火をともしながら。

風に吹かれて

- ① 砂漠を転がってゆく、草の塊のボール。
- ② あれは、何という名前だったっけ。
- ③ そんなことを考えながら、忘却の大地で一人バーベキューをする。

東方見聞録

- ① パンダに乗って旅に出た。
- ② わたしは、ブルースハープを吹くことでパンダを操れるのだ。
- ③ 時おり荒鷲と格闘しながらも、我々はジパングを目指すのだ。

サンタース

- ① カーネルおじさんは、何を夢見ているのだろう。
- ② チキンとペパーのかおりに包まれて。
- ③ 僕は彼の目の前に立ち、深夜の街角でにらめっこに興じる。

だれか、かの女のことを覚えていたのだろうか？

- ① 幸運嬢は台所の真ん中に坐り込んでいた。
- ② 床にはベージュ色の写真を幾枚も並べ、シチリア製の窓は閉め切ったままだった。
- ③ かの女は幸運には恵まれなかったものの、けして不幸ではなかった。

結もなしに

- ① 起きる。
- ② 承ける。
- ③ 転がってゆく——どこまでも。

土曜日の本

「 弥勒菩薩考

朝靄の中、まだ雪の残る山路を、一人の行者が歩いていた。行者は地面を滑るような、踊るような足取りで歩みを進めていた。いつから歩き続けているのか、もうどれくらい歩いたのか、綺麗さっぱり忘れたままで彼は歩き続けていた。行者は疲れを知らなかった、ただ、山の空気の味わい深さは知っていた。木々の間から差し込んで来る陽の光が、路傍の霜に照射して輝いていた。

行者はふと立ち止った。傍らには、巨大な岩が聳え立っていた。その岩の上を、何か赤茶けたくしゃくしゃしたものが蠢いていた。何だろう、猿かそれとも狸か、と思って見てみれば、この辺りに住む村人だろうか、檻樓を着て、赤茶けてくしゃくしゃの髪の毛をした少女が、片手に大きな器を捧げ持ったまま、岩をよじ登っていたのである。少女はそのアクロバティックな芸当を、顔色一つ変えずにこなしているのだった。

「お早う」と行者は、その後ろ姿に向かって呼びかけた。

「お早うございます」上の方から、赤茶けてくしゃくしゃの髪の毛をした少女が応えた。

「それはお供えですか」と行者は問うた。

「ええ」と少女は言った。「ミロクボサツにお供えするものです」

「成る程。ミロクさまに——」行者は頷いた。

「わたしは毎日欠かさず、こうしてお粥をお供えしにここへ来るのです」

「成る程」と行者。「殊勝なことです」

「そしてミロクさまを、ずっとお待ち申し上げているのですよ」と少女。

「成る程」行者は深々と頷いた。「感心なことです」

少女は岩の上の方に、粥の入った器を置いた。器から立ち上った煙が、山の澄んだ空気の中に溶け込んでいった。穀物を煮炊きした時に生じる甘い匂いと、香料の匂いとが漂って来た。器を置くと、少女は岩の上から軽々とした動きで降りて来た。彼女の足取りに合わせて、赤茶けてくしゃくしゃの髪の毛が揺れていた。

行者は岩にもたれて腰を下ろし、赤茶けてくしゃくしゃの髪の毛をした少女はその隣に坐り込んだ。木々の間を縫ってこぼれてくる陽の光の色が、もうすぐ訪れるであろう春を思わせるようで心地よかった。

「ミロクさまは五十六億七千万年後に現れなさと聞きます」と少女は、くしゃくしゃの髪の毛を風になびかせながら言った。

「ええ、その通りです」

「それにしても、とんでもなく長い歲月ですね」

「そうですね。とほもない年月です」

「何しろ、五十六億七千万年後なのですから」

「想像もつかない年月ですね」と行者は頷いた。

「私は、五十六億どころか、一億年の歳月だって、どれほど長いのか想像することもできません」

「そうですね——」

「おそらくわたしの命は、待っている間についでしてしまうでしょうね」

鳥の甲高い声がした。行者はその鳥の名前を知らなかった。不思議な鳴き声が谷間に溶け込んで行くのを聞き届けてから、行者は言った。「おそらく、そうですね」

「でも、待つことにはかくべつの楽しさがありますから、それはそれで、好いのですよ」
「そうですね」

「ええ、そうですね」と少女は、くしゃくしゃとした髪の毛をいじりながら言った。「この辺りの冬はえらく長いのです。みじめで寒くて、わたしは冬がきらいです。ただ、春を待ちわびている時の心持は好きなのです。」

「成る程」

『もう少しすれば、雪の下からフキノトウが芽吹く時分だ。早く食べたいなあ、きつと食べたいなあ』とわくわくしながら待っているのは、とても素敵ですよ」

「成る程」行者は頷いた。「——それで、いよいよミロクさまがご降臨なすったら、どうなさいます？」と、行者。

「そうですね」少女はしばらく考えた後、「あたたかいものでも差し上げて、おもてなしするのが好いですね」と答えた。「たぶん、お粥をお出しするでしょう」

「成る程。いつものように、お供えをするわけですね」と言って、行者は笑った。

「ところで、まだお鍋の中にお粥が残っているのですが、行者さまも食べますか？」と、少女。

「それは有難い」行者は一礼した。

「ちよつと待っていて下さいね、すぐ持って来ますから」少女は立ち上がった。

そして行者は朝露に濡れた岩の下で、少女が運んで来た粥を食べた。乳白色の粥は雪のようにとろける味がした。

「これは乳粥ですね」と行者は言った。

「ええ、そうですね」と少女は頷いた。「お釈迦さまも、苦行の後にこれを召し上がったそうですね」

「そう思いながら頂くと、かくべつの味わいがありますね」と行者は言った。

行者は少女に別れを告げると、地面を滑るような、踊るような足取りで山の茂みの中へ消えて行った。赤茶けてくしゃくしゃの髪の毛の少女はその後ろ姿を見送ると、木立の中に立つ小さな家に戻って行った。

二人がその後どうなったかは誰も知らない。しかし、この出来事のしばらく後に、山にたくさんのフキノトウが芽吹いたのは、確かなことであろう。

II ロード・ムービー

一台のバンが、国境線近くの田舎道を凄まじいスピードで走っていた。しかし、そのスピードの凄まじさをもってしても、車窓の外を流れる景色は相も変わらずのんびりと動いて行くばかりである。あまりにこの平野が広すぎるのだ。空よりも広いのかと思われるほどだ。見渡すばかりのトウモロコシ畑、その中を飛び跳ねて行くこのバンは、まるで一匹の小さなカナブンのようである。

バンの中では二人の若者がインディアン・ポーカーに興じていた。一人は巨大な丸いサングラスをかけた男、もう一人は不健康なまでに健康的に日焼けした褐色の肌を持つ男で、二人とも真昼間から酔っ払っていた。二人は嬌声を上げながら額にカードをかざし、そして放り捨てた。もはやルールも勝負も何もかも無視して、彼らは出鱈目にカードを引き、それをかざしては投げ、かざしては投げるのを繰り返していた。ウキスキーによって頭は朦朧とし、凸凹道走る車の揺れがすぐに山札を崩し、ばら撒いてしまう。二人はまともにゲームをするのを諦めてしまった、そして諦めてしまった方がずっとハッピーだということに気づいたのだった。

ふいに、カーステレオから不思議な音楽がこぼれて来た。鋸をひいているようなギターの音と、老人の独りごとのようなベースの音とが、ドラムマシンの無機質なリズムを媒介にして絡み合い、そのぐちゃぐちゃとした空気の中を、頼りない音程の黄色い声が流れていて……………

「ちよつと、ちよつと、ホーキちゃん、ストップ！」インディアン・ポーカーに興じていた二人のうちの一人、巨大な丸いサングラスをかけた男の方が慌ててそう言った。ホーキちゃんVと呼びかけられたのは、バンを運転している女の子——彼女の赤茶けてくしゃくしゃの髪の毛がホーキの先に似ているから、そんなあだ名で呼ばれているのだろうか。そしてホーキちゃんは思い切りブレーキを踏んだ。「ちがう、ちがう！車をストップさせるんじゃないくて、その音楽をストップして！」

音楽が止み、バンは再び加速した。

「何だいさっきの曲は！」サングラス男が言った。「なんだか、気の狂ったチョウチンアコウが唸ってるみたいな音だったじゃないか。あんな酷い Music は久しぶりに耳にしたね。一体誰の曲だったんだ？」

「お二人の」と、ホーキちゃん。

「そうだよ。昨日録ったデモテープだろ？さっきのって」と、不健康なまでに健康的に日焼けした男が言った。「夜中にしこたま酒飲んでさ、なんかノってきたからジャム初めて、そいでホーキちゃんにカセットテープ回してもらって録音したじゃん、あの時のテープだよ」

「さっぱり思い出せない」サン格拉斯男は首をかしげる。

「困ったもんだ」日焼け男は肩をすくめる。

「ホーキちゃん、ちよつともう一回かけてみて」

再び車内に流れ始める不吉な音楽。鋸をひいているようなギターの音と、老人の独りごとのようなベースの音とが、ドラムマシンの無機質なリズムを媒介にして絡み合い、そのぐちゃぐちゃとした空気の中を、頼りない音程の黄色い声が流れていて……。

「いや、やっぱりなかなかイイな、これ」と、サン格拉斯の男。

「うん、悪くないよ」日焼け男も頷いた。

面白い人たち、とホーキちゃんは思った。彼女はローディー、この二人はロック・バンドのメンバー、こぢんまりとしたバンに乗って、『ツアー』と呼ばれる地方巡業の真っ最中なのである。

「どう、これ、ホーキちゃん。よくない？」日焼け男が得意げな顔つきで言った。

「うーん、よく分からない」と、ホーキちゃん。

「そう、分からないところが、いいんだよ」サン格拉斯男が勿体ぶって言った。

奇妙な運命に導かれたものだ——最初、ホーキちゃんは友だちに連れられてこのバンドのライブに訪れたのだった。蒸し暑い地下のライブハウス、友だちは熱狂していたが、ホーキちゃんは何がいいのか全然分からず、ドリンクバーでレッドアイを黙々と飲んでいたものだ。

ほどなくして、ホーキちゃんと友だちは、二人揃ってそのバンドのローディーになった——友だちは情熱から、そしてホーキちゃんは他にやることもなかったから。

しかし、友だちは半月足らずで辞めてしまった。日常生活におけるサン格拉斯男と日焼け男が、ろくでもない飲んだくれだったことを知って幻滅したこと、そして毎日毎日大量のよごれ物を洗濯させられることにすっかり嫌気がさしてしまったらしい。ある夜、友だちはこっそり車から抜け出し、そして何処へともなく去っていった。それきりだった。

朝が来て、彼女と彼女のスーツケース、そして幾らかのお金が消えてしまったことが明るみになっても、サングラス男も、日焼け男も、何も言わなかった。こういう事件って折に触れて起きるよなあ、という顔つきでお互いを見交わしているだけだった。そして何事もなくツアーは続くのだった。

「ねえ、ホーキちゃん、次のライブ会場にはいつごろ着くの？」とサン格拉斯男。

「七十時間後くらい」とホーキちゃん。

「あと三日三晩、ぶっ続けで走るって訳か」日焼け男が伸びをしながら言った。「過酷な労働だよなあ」

「まったく。辺鄙な場所ではっかり演奏させられるから、困ったもんだね」とサン格拉斯男。「ウキスキーでも飲まないよ、やってられないよ」

まったく、このツアーのプロモーターは一体何を考えているのだらう——ホーキちゃんも首を傾げる。とにかく、ライブ会場がいつも風変わりなのだ。やたらと狭いパブや、スーパーマーケットの入り口などで演奏させられたのは、まだ理解できる。しかし、野外ライ

ブという話を聞いて行ってみるとそこは田圃の真中で、あぜ道に機材を並べて演奏したこともあった（その時のライブは、呆気にとられている農民たちと、無表情の案山子とが観客だった）。マンホールの中に入って、下水管の上に乗って演奏したこともあった（これはわりと盛況だった——地下をめぐらしているホームレスたちがたくさん訪れたのだ。下水道の中には意外にもたくさんの方が住んでいるのだなと、ホーキちゃんは驚いたものだ）。ラーメン屋の屋根の上で演奏した事もある（これはラーメン屋から苦情が来て、途中で中止になった。どうやら、きちんと事前の打ち合わせが出来ていなかったらしい）。次はどこなところに行かされるのか、どんなところで演奏をさせられるのか、分かったものではないのだ。

ホーキちゃんはアクセルを踏みしめる。窓から吹き込んで来た風が、彼女の赤茶けてくしゃくしゃの髪の毛を躍らせる。凄まじいスピードでもってバンがすっ飛んで行く。しかし、そのスピードの凄まじさをもってしても、車窓の外を流れる景色は相も変わらずのんびりと動いて行くばかりである。あまりにこの平野が広すぎるのだ。空よりも広いのかと思われるほどだ。見渡すばかりのトウモロコシ畑、その中を飛び跳ねて行くこのバンは、まるで一匹の小さなカナブンのようである。

唐突に、日焼け男が口を開いた。「なんかノって来た」

サングラス男が聞き返す。「え、なんだって？」

日焼け男「このテープ聴いているうちに、ノって来たってこと」そしてホーキちゃんの方を向いて「ちよっとホーキちゃん、車止めて。ちよっとくらい休憩を取っても大丈夫だろ？」

「おいおい、どうしたんだ」とサングラス男。

「このテープに合わせて、ジャムろうぜ」

最初は乗り気でなかったサングラス男も、バンが停まると、渋々ベースを持ち出して来てアンプに繋いだ。日焼け男はギターを抱えて颯爽と車外に飛び出し、トウモロコシ畑に囲まれた田舎道でロック史上に残る名演をものにすべく武者ぶるいしていた。

「じゃあ、演るから、聴いてくれよ、ホーキちゃん！」日焼け男が叫んだ。

ホーキちゃんは、まるで母親のような笑い顔でもってそれに答えた。

そして、トウモロコシ畑に響き渡った、不吉な音楽。鋸をひいているようなギターの音と、老人の独りごとのようなベースの音とが、ドラムマシンの無機質なリズムを媒介にして絡み合い、そのぐちゃぐちゃとした空気の中を、頼りない音程の黄色い声が流れ始め・・・・・・と、ふとその時、ホーキちゃんは悪戯心を起こした。感極まったサングラス男が、「なあ、ぶっ飛んだサウンドだろう！」と叫んで振り向くと、ホーキちゃんはバンに乗り込み、二人を置き去りにして猛然と走り去ったところだった。

バックミラーに映った、血相を変えて追いかけて来る二人を見て、ホーキちゃんは大笑いした。そして、もう少しで完全に引き離してしまふ、というところで彼女は思い切りハンドルを切り、今度は二人の方を目掛けて走り出した。回れ右して、血相を変えて逃げて行く二人の後ろ姿を見て、またぞろホーキちゃんは笑い転げた。とうとう二人が力尽き、

田舎道の端にどうと倒れ込むと、ホーキちゃんはブレーキを踏みしめて車を急停車させた。そして車の外に転がり出て、大笑いしながら倒れ込んだ。赤茶けてくしゃくしゃの髪の毛が翻った。彼女の笑い声につられて、サングラス男と日焼け男も、息も絶え絶えに笑い始めた。太陽と、トウモロコシに見降ろされながら、三人は涙を流して笑い転げた。巨大な国土の片隅、誰も知らない場所で、飽きることなく笑い続けた。

そのバンドは、未だにツアーを続けているかもしれない。ひよつとしたら、あなたの街にもやって来るかもしれない——いや、今まさに、やって来ているかもしれない。やたらと狭いパブ、スーパーマーケットの入口、田圃の真ん中、下水道の中、ラーメン屋の屋根の上、もしくは、その他の場所で、彼らの姿を見かけたならば、立ち止まって、少しの間でいいから耳を傾けてやってほしい。そして彼らのそばに、赤茶けてくしゃくしゃの髪の毛をしたローディーが居たならば、ねぎらいの言葉をかけてやってほしい。

III 空飛ぶムニエル

時にそれは、道端に生えたペンペン草だったりする。日向くさくて埃っぽい昼下がり、遠くの工場から聞こえて来るモーター音や、高架橋の上を走る電車の足音を、聞く気もなしに聞いていたりする。そんなペンペン草の生い茂った道を通って、埃にまみれた靴が向くままに歩き続けられ、「立入禁止」の看板が二十年も前から立っている空地に行き着く。空地の真ん中には、コンガが捨てられていた。時にそれは、立入禁止の亜紀地に捨てられているコンガだったりもする。

コンガを拾い上げ、戯れに叩いてみる。発生した円い音のかたまりは、空気よりも軽いので次々と飛んで行く。飛んで行った音のかたまりは、静けさに穴をあける。時にそれは静けさだったりする。

時にそれは置き去られていたりする。時にそれは当り前にそこに在ったりする。自転車だったり、鉄塔だったり、イスだったり、集合住宅だったり、川だったり、帽子だったり、レンガだったり、とどまるところを知らない。別に何も考える事もなければ、しゃべる必要もないのだ。そうやって黙り込んでいると、いつの間にかそれを待っている自分に気づく。時にそれを待ってみたりもする。

My Head Is My Only House Unless It Rains. — Don Van Vliet

時にそれは、安価だけれど新鮮な鮭だったりする。はたまたそれは、その鮭を使って作ったムニエルでも有り得る。更に、そのムニエルを食べる小さな子どもだったり、ムニエルを作った母親だったりもする（たいてい子どもは白けた眼をしていて、母親はかなしい眼をしているものだ）。そして、ムニエルになる日待つ鮭たちでいっぱい冷蔵庫——冷蔵庫が置いてある台所——台所に現れた団欒——「団欒」と呼ばれる、奇妙で平穏な時間

でも有り得る。

そういった諸々のものが発光して、街に灯がともる。時にそれは、街にともったたくさん
の灯りだったりする。それはちよつとしたスペクトルだ。宇宙的と言ってもいいだろう。
天気さえよければ、空の上に雲と一緒にムニエルが浮かんでいるのが見えるだろう。時に
それは、見た事もないほど見慣れた風景でもあるのだ。

時にそれは、何だって有り得る。同時に、何者でもない。そして泣いたり、笑ったり、
飛び跳ねたり、どこかに行ってしまったり、忘れてしまったり、忘れられてしまったりす
る。出鱈目で、懐かしくて、気狂いじみでいて、かたちもない、つめたい水、澄みきった
空気、陽光――。

日向くさくて埃っぽい昼下がり、立入禁止の空地の中でコンガを叩いている。顔を上げ
ると、赤茶けてくしゃくしゃの髪の毛をした女の子が立っていた。

時にそれは、赤茶けてくしゃくしゃの髪の毛をした女の子だったりする。

時にそれは、あなただったり、わたしだったりする。

IV 春菊を忘れて

ありふれた土曜日の夕暮れ時だった。

わたしは春菊を買いに八百屋へ来たはずなのだけども、気づいたら一冊の古本にすつか
り心奪われてしまい、当初の目的を忘れてしまっていた。トウモロコシが山と盛つてある
カゴの横に、その本はひっそりと置き去られていたのだ。

通う人もいなくなり倒壊しかかっている古い教会の前に、わたしの行きつけの八百屋の
屋台が出ている。しなびたカボチャやレタスを前に、店の少年が一人座っている。少年
は、口周りにヒョロヒョロと無精ひげを生やし、輝きのない大きな瞳をまぶたで半分だけ
隠していた。

わたしは本を手に取り、布張りの表紙の手ざわりを楽しみながらページをめくっていた。
何語なのか見当もつかないような奇妙な文字が、アリの行列のように並んでいた。さっぱ
り読めない、というのがまた魅力的だった。わたしはいつしか、その本に夢中になってい
た。

「ほしいの？その本」

とつぜん、店の少年にそう呼びかけられて、わたしは思わず心臓が口から飛び出そう
になってしまった。まるで心の中をのぞかれてしまったようだ、わたしはそう思った。

「安くしとくから持っていいよ、お嬢さん」そう言つて少年はわたしを見上げた。

わたしはその本をポケットの中にすべりこませた。まるで、本のサイズに合わせてポケ
ットをしつらえたのかと思えるほど、それはしつくりと収まった。

そしてわたしは、いつもより人通りの多い週末の街路を、いつもより軽やかな足取りで歩

きはじめた。風が風いでいるため、わたしの赤茶けてくしゃくしゃの髪の毛は大人しくしていた。もうすっかり春菊の事など忘れてしまっているのだけど、それも仕方ないことだ。とりあえず、こんなに素敵な気分なのだから。

栗鹿毛のカンタカ

一・

光に満ちた長い夏が過ぎ去り、肌を突き刺すような寒さを伴う秋の風が身延山中を吹き始める頃、日蓮は栗鹿毛の馬に跨り、近しい門弟たちを引き連れて山を下りた。鞍の上、いくぶん高い場所から眺める景色は馬の足取りに従って規則正しく揺れており、馬の首筋に手を添えていると、体温が体中に沁み渡ってゆくように心地よかった。空の色はもの寂しさを増し、これから厳しい季節がやって来るであろうことを予感させるものであった。

「常陸の湯でゆっくり養生なされば、必ずやお体の具合もよくなれることでしょう」従者の一人がそう言った。

身延の山に庵を結んでから八年——それは日蓮にとって、決して平穏な日々ではなかった。山中の生活は厳しく、冷気と年齢とが彼の身体を日に日に蝕んでいった。門下の訪問と供物、そして日夜紐解く法華経を心の糧として、何とか命の火を絶やさずに今日まで至ったが、遠からず訪れるであろう冬を越すことは、もはや無理であろうと思われた。そして弟子や門人の勧めに従い、常陸の国へ湯治に出かけることにしたのである。

しかし、こうして栗鹿毛の馬に跨って、後ろへ後ろへと遠ざかってゆく風景を眺めていると、不思議な感慨の断片が胸中を去来するのである。彼が向かっている方角は、身延から見て東方——懐かしい故郷の方であった。淡々と蹄鉄の音を鳴らしながら歩む馬に導かれ、故郷を目指して進んでいるかのような、そんな気がした。

二・

その後日蓮一行は、信徒であるところの池上氏の邸宅に到着し、ひとまず休憩することにした。日蓮の身体の疲れが回復したらば、再び出発する心づもりであった。

日蓮は久しぶりに落ち着いて床に伏せることができ、安堵のため息をついた。すると、自分をここまで運んでくれた馬がいとおしく思われ始めた。

そこで日蓮は、湯治を終えて戻って来た折には、この栗鹿毛の朋友と再び見たいものだと思い、馬丁をつけて預けておくことにした。その段取りを済ませた彼は、自分の中に芽生えた人間臭い情をあらためて面白く感じた。

俗世を離れ、ありとあらゆる執着を断ち切るべく修行に励み続けていれば、何も感じない、何も思わざる境地に達するであろう——かつて彼はそう信じていた。しかし時が経った今、自分の中に残っているものは、この世界への純粹ないとおしさに他ならなかった。それは歳月を重ねるにつれて穏やかなものとなり、そして静かなものになっていった。仏道者は、虚無主義者になるための修行に勤しんでいたのではなかった。ひとりの人間として時に悩み、時に飲むための修行を重ねていたのだった。

身延の山にこもっていた時、肉親や子供と死別した門弟達から嘆きの手紙をもらうこともあった。日蓮は彼らを何とかして励まそうと一生懸命返事を書き、時には一緒に涙することもあった。それは、戦鬨的、非妥協的な態度で知られる彼の Image とは余りにかけ離れた姿であった。それこそが、彼の実像であったのかも知れない。

そして日蓮は、敬愛する釈迦のことを思い出すのであった——釈迦の寿命が尽きようとする時、彼の弟子であるアーナンダーは、師の背後で悲しみの涙を流していたという。釈迦はアーナンダーに泣くのを止めるよう呼びかけ、「私の教えを理解しているならば、何も悲しむことなく、何も恐れることがないと思えるはずだ」と彼を励ました。釈迦はそうに呼び掛けつつも、アーナンダーの悲しみと恐れを誰よりも深く汲み取っていたに違いない。

そして釈迦も、世を厭わしく思い家を捨てた身ながら、その生涯を閉じようとする時には不思議な感慨を抱いたものである。彼は「この世界は、五色もて描いたように美しいものだ」と語ったという。それは釈迦の偽らざる本心が発露した言葉であったことだろう。釈迦は言うまでもなく超越的な人物であったが、何よりも先にひとりの人間であり、ひとりの人間として生きようとしたのである。自分は、その気概を受け継ぐ者である——日蓮はそう思い続けて来た。

三.

池上邸でゆっくり体を休めることが出来たものの、日蓮の衰弱は予想していた以上に深刻であった。ついには、湯治で英気を培った後に身延に戻るどころか、湯治に赴くことすらもがもはや無理であるように思われた。弟子たちは続々と駆けつけ、師をひしと取り囲み、その痩せ衰えた身を氣遣った。しかし当の日蓮は、集まった弟子たちに向かって、『立正安国論』を朗々と講じ始めた。

『立正安国論』は日蓮の出発点ともなった著作で、ますます不安や混沌を増してゆく社会に向けての警鐘であり、時の為政者たちに対する叱咤であった。それによって彼の苦難の生涯は幕を開け、数え切れぬ迫害に遭い、逆境に立たされた。しかし、彼の残した「王地に生れたれば、身をば随えられたてまつるようなりとも、心をば随えられたてまつるべからず」という言葉に見られるように、何ものであるとその信念を曲げることは出来なかった。

そして今、二十余年の時を経て、再び日蓮は『安国論』を講じていた。彼の身は病に蝕まれ、命の火は燃え尽きようとしていた。だが、それは彼にとつて取るに足らぬことであった。病もまた、彼の身をば随えることは出来ても、心をば随えることは出来なかったのである。そして命が尽きる時、彼自身の心もまた無に帰する瞬間は来るだろうが、しかしその信念は教説という形に変わり、生き続ける。日蓮は法華経を紐解くことで、いつでも釈迦に会えていたように、こうして今自分を取り囲んでいる弟子たちも、彼の教えを思い出せば、いつでも彼に会う事が出来るのだ。それならば、どうして死は恐れるに足る事が

あろうか——日蓮は、そう思っていた。

日蓮の容態は悪化の一途をたどり、とうとう十月十三日の朝、命終が近づいた。

日蓮は、自分の背後に座し、敷物に寄りかかったまま涙を流していた門徒に向かって告げた。「泣くのを止めなさい。悲しむこともないし、嘆くこともない。何も怖がることはない。恐ろしいことなど、何ひとつない」

そして日蓮は最期の息を吐きながら、弟子たちと共に法華経を読誦し始めた。その声は朝の静けさの中で、確かな質感を伴って響いて行った。一定のリズムを有するその響きは、いつしか馬の足音に変化していた。彼は栗鹿毛の馬に跨り、朝の空気の中を歩いていた。川のほとりまで行くと、彼は馬から降りた。そして彼は坐り込み、自ら剃髪を行なった。

「この馬を頼む」剃髪が終わると、彼はそう言って従者に馬を託した。

今日から、新しい修行の日々が始まるのだ。晴れやかな気持に満たされながら、彼は歩き始めた。

その昔、書写山に性空上人という高僧がいた。彼は法華読誦の功積もりて、豆の会話を聞き取れるようになったのだと言う。

それは彼が旅の途中で経験したできごとである。一休みしようと立ち寄った宿屋で、店の主人が豆殻を燃やし、その火に鍋をくべて豆を焚いていた。その時、焚かれている豆が己の真下で燃え盛っている豆殻に向かって「お前はかつて俺の一部だったというのに、なぜ今はこうして俺に苦難をもたらしているのか」と文句を付けはじめたのである。これに対し、豆殻は「そんなこと言うなよ、仕方無いじゃないか」と言い返したのだと言う。ただそれだけの話である。

さてその一方で、俗人、凡人たる僕はと言うと、台所で昼飯の用意をしている最中だ。僕の目の前では、フライパンの上に二匹並んで横たわっている魚たちが何事かぺちやくちやしゃべり合っている。しかし俗人、凡人たる僕は、彼らの言葉を一語も解せずにいる。

フライパンの上の魚たちは一体何の話をしているのだろう、愛の睦言を交わしているのか、はたまた痴話喧嘩をしているのか、まったく見当もつかない。どだい僕のような人見知り、魚たちのコミュニケーションに首を突っ込み、その真意を理解しようとする行為自体が間違いなのであろう。なぜならば僕は魚の言葉を理解するどころか、同じ種族であるにんげんの言葉すらも満足に理解できず、砂をかみ臍をかむような思いで生きているからである。

僕は焼きあがった二匹の魚を皿に移す。バターの香りが鼻に心地よい。僕はレモン汁を少々その上に垂らし、さらに醤油をかける。シルで香り付けをしたスープを皿に注ぎ、冷蔵庫からコーンサラダを出す。水っぽく炊き上がったごはんを茶碗に盛っている間も、魚たちはおしゃべりを続けていた。

食卓に食べ物を運び、テレビをつけ、窓を開くと吹き込んで来る風が実に眠たげで心地よい。完璧に調和の保たれている午後の風景の真ん中で、魚たちは語り合っている。僕は両手を合わせ、昼下がりの柔らかな日差しに横顔を照らされながら、誰に向かってでもなく言う。

「いただきます」

